

平成 26 年度・27 年度盛岡市内遺跡群

赤 袈 遺 跡

—第 3 次・第 4 次発掘調査報告書—

2018. 3

盛岡市教育委員会

平成 26 年度・27 年度盛岡市内遺跡群

赤 裊 遺 跡

—第 3 次・第 4 次発掘調査報告書—

2018. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は、北上盆地北部に位置し、北上川、雫石川、中津川の合流点に開かれた、岩手県の県庁所在地です。豊かな自然環境のもと、高次都市機能の集積する地方中核都市として、発展してまいりました。

市内には旧石器時代から江戸時代に至る 786 箇所の遺跡が存在します。国、県、市の指定史跡として保存活用が図られている遺跡もありますが、多くの埋蔵文化財は各種開発によって姿を変え、あるいは消滅することも少なくありません。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国、県の補助を受け、市内の個人住宅等建築に伴う発掘調査を継続しており、その調査成果は、地域の歴史を知るうえで大変貴重な成果となっております。

本書は、平成 26 年度から 27 年度にかけて実施しました、盛岡市内遺跡群のなかの赤袋遺跡の発掘調査報告書であります。この遺跡は、平安時代後期の奥六郡に君臨した、安倍氏の土器生産遺跡として、調査当時から注目を集めておりました。市民はもとより、地域の歴史を紐解くための資料として、広くご活用いただきましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、事業を進めるにあたりまして、多大な御指導と御助言を賜りました、文化庁文化財部記念物課、ならびに岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課に対し、深く感謝を申し上げますとともに、発掘調査に御理解と御協力をいただきました、地権者の皆様、地域の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁 一

例 言

- 1 本書は平成26年度と平成27年度に、国、県の補助事業として実施した、盛岡市内遺跡群赤裳遺跡第3次、第4次発掘調査の報告書である。
- 2 本書は遺構、遺物の実測図などの資料提示を意図して作成し、編集執筆は室野秀文が担当し、菊地幸裕、津嶋知弘、神原雄一郎、花井正香、佐々木亮二、鈴木俊輝、今松佑太、及川栞里が協力した。
- 3 遺構の平面位置は、日本測地系を用い、平面直角座標第X系を座標変換した調査座標で示した。

$$\begin{aligned} \text{赤裳遺跡 調査座標原点 } X - 31,000,000 \text{ m} &= RX \pm 0,000 \text{ m} \\ Y + 23,000,000 \text{ m} &= RY \pm 0,000 \text{ m} \end{aligned}$$

- 4 高さは標高値をそのまま用いた。
- 5 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使い分けている。土層註記は層位ごとに記したが、堅穴建物内の柱穴やがなどの細部については割愛している。なお、層相の観察にあたっては、(小山正忠、竹原秀雄編 1970『新版 標準土土色帖』農林水産省水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所監修)によっている。
- 6 遺構の名称及び記号は次のとおりである。

遺構	記号	遺構	記号	遺構	記号
建物跡	RB	堅穴建物跡	RE	溝・堀	RG
柱列跡	RC	土坑	RD	その他	RZ

- 7 使用した地形図は国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図「盛岡」「日詰」を10万分の1に縮小編集して使用している。
- 8 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。
- 9 本調査成果の一部については、現地説明会資料や発掘調査成果報告会等で公開しているが、内容が異なる部分については、本書をもって訂正する。
- 10 調査の体制は次のとおりである。

事業の指導・助言 文化庁文化財部記念物課 岩手県教育委員会生涯学習文化財課

調査主体

盛岡市教育委員会 教育長 千葉 仁一
 教育部長 豊岡 勝敏
 教育次長 中野 玲子(～H28) 大倉 真澄(H29～)

歴史文化課

課長兼遺跡の学び館長 袖上 寛(～H27) 杉本 浩(H28～)

歴史文化課(事務局) 遺跡の学び館

課長補佐 吉田 宏明(～H28) 館長補佐 北田 牧子(～H28)
 福田 淳(H29～) 多田 秀明(H29～)

文化財主査 三浦 陽一 文化財副主幹 室野 秀文

学芸主査 岡 聡 文化財副主幹 菊地 幸裕

文化財主査	今野公顕	文化財主査	神原雄一郎
主任	寺島幸子(～H28)	文化財主査	花井正香
	吉田智春(H29～)	文化財主査	佐々木亮二
主事	菊池祥宏	主任	川村忠(H29～)
	泉山翔太(H29～)	主事	佐藤美沙(～H28)
文化財調査員	鳥取邦美	文化財主事	鈴木俊輝
文化財調査員	千葉茉耶	文化財調査員	日野杉潤子
文化財調査員	戸澤博子	学芸調査員	樋下理沙
学芸調査員	中里早希(H29～)	文化財調査員	今松佑太
事務嘱託	齊藤晃大	文化財調査員	及川栞里
		学芸調査員	鈴木由香(～H27)
		学芸調査員	坂本志野(H28～)

発掘調査及び報告書作成(五十音順敬称略)

阿部 真紀子 阿部 正幸 阿部 有子 天沼 芳子 伊藤 敬子 長内 理恵
 及川 亜矢子 及川 京子 川村 久美子 熊谷 あさ子 小松 愛子 小茂田 実
 佐々木 富士子 佐藤 和子 佐藤 公一 佐藤 美智子 佐野 光代 谷藤 貴子
 千葉 智子 千葉 留里子 西田 千佳 袴田 英治 樋口 泰子 細田 幸美
 村上 幸子 村上 美香 前田 和代 成ヶ澤 千恵 山田 聖子

地権者

福士 良市 福士 チヨ

指導、助言

浅利 英克(金ヶ崎町教育委員会) 飯村 均(福島県文化振興事業団)
 井上 雅孝(滝沢市教育委員会) 宇部 則保(八戸市教育委員会) 及川 真紀(奥州市教育委員会)
 君島 武史(北上市埋蔵文化財センター) 杉本 良(北上市立博物館)
 高橋 麻衣子(金ヶ崎町教育委員会) 西野 修(矢巾町教育委員会) 羽柴 直人(岩手県立博物館)
 八重樫 忠郎(平泉町役場) 八木 勝枝(岩手県立博物館) 八木 光剛(岩手大学)

調査協力

国立病院機構盛岡病院 株式会社タックエンジニアリング

11 平安時代の土器の分類は、酸化炎焼成の土器を土師器、還元炎焼成の土器を須恵器とした。須恵器は3点の破片のみ出土しており、他はすべて土師器である。本文中で特にことわりのない場合はすべて土師器である。なお本遺跡は土器生産遺跡であり、破片の全面や一部が灰色や青灰色の還元炎焼成となっており、器形や制作技法の特徴が土師器に共通する場合は土師器として報告している。

目次

序言

例言

目次

I 遺跡の環境	1
II 調査経過	5
III 調査成果	9
1 基本層序と遺構確認状況	9
2 遺構と遺物	10
IV 総括	59
1 遺構についての考察	59
2 遺物についての考察	60
3 まとめと課題	63
抄録	

図版目次

第1図版	遺跡周辺空中写真
第2図版	遺跡全景
第3図版	第4次調査区全景, RE01 竪穴建物跡
第4図版	第3次調査区全景, RD02 土器焼成土坑
第5図版	RD02 土器焼成土坑
第6図版	RE01 竪穴建物跡, RD20 土器焼成土坑
第7図版	RD01 竪穴建物跡, RE01 竪穴建物2期
第8図版	RE01 竪穴建物跡轆轤穴
第9図版	RE01 竪穴建物跡轆轤穴
第10図版	RD16 土坑
第11図版	調査風景
第12図版	RE01 竪穴建物出土土器 (床面, E層)
第13図版	RE01 竪穴建物出土土器 (轆轤穴, D層)
第14図版	RE01 竪穴建物出土土器 (床面)
第15図版	RE01 竪穴建物出土土器 (E層, B2層)
第16図版	RE01 竪穴建物出土土器 (土器溜り, B3層)
第17図版	RD02, RD13 土坑出土土器
第18図版	RD13, RD18 土坑出土土器
第19図版	土製品, 石製品, 石器, 鉄製品

表目次

表1 赤装遺跡発掘調査一覧……………3

挿図目次

第1図 赤装遺跡及び関連遺跡位置図……………1

第2図 周辺遺跡位置図……………3

第3図 赤装遺跡全体図……………6

第4図 発掘調査区及び調査グリッド配置図……………7

第5図 調査区遺構全体図……………8

第6図 RE01 竪穴建物跡 (1)……………10

第7図 RE01 竪穴建物跡, RD20 土器焼成土坑土層断面図 (1)……………11

第8図 RE01 竪穴建物跡, RD20 土器焼成土坑土層断面図 (2), 輻穴……………13

第9図 RE01 竪穴建物跡 (2), 土器焼成土坑……………15

第10図 RE01 竪穴建物跡 (3), RD18 土坑……………16

第11図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (1)……………18

第12図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (2)……………19

第13図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (3)……………20

第14図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (4)……………21

第15図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (5)……………22

第16図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (6)……………23

第17図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (7)……………24

第18図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (8)……………25

第19図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (9)……………26

第20図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (10)……………27

第21図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (11)……………28

第22図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (12)……………29

第23図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (13)……………30

第24図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (14)……………31

第25図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (15)……………32

第26図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (16)……………33

第27図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (17)……………34

第28図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (18)……………35

第29図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (19), 土製品, 石製品……………36

第30図 RE01 竪穴建物跡, RD02 土器焼成土坑出土鉄製品と石器……………37

第31図 RD02, RD13, RD14 土器焼成土坑……………40

第32図 RD02 土坑出土土器 (1)……………41

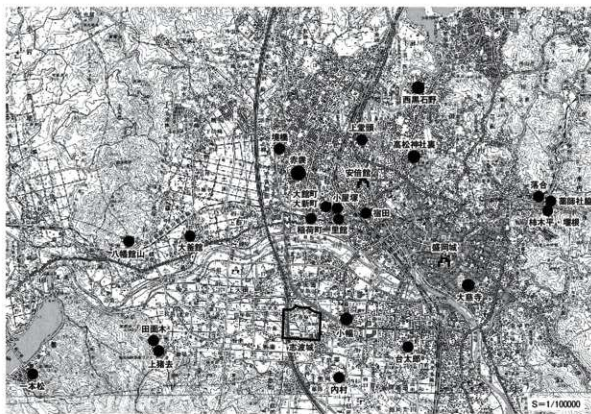
第33図 RD02 土坑出土土器 (2)……………42

第34図	RD02土坑出土土器(3).....	43
第35図	RD02土坑出土土器(4).....	44
第36図	RD13, RD14土坑出土土器.....	45
第37図	RD11, 12, 15, 16, 17土坑.....	47
第38図	RD11, 12, 15, 16, 17土坑土層断面図.....	48
第39図	掘立柱建物跡, 柱列跡, 柱穴群.....	51
第40図	RB01, 02, 03掘立柱建物跡.....	52
第41図	RB04掘立柱建物跡, RC01, 02掘立柱列跡.....	53
第42図	柱穴群土層断面図.....	54
第43図	土坑(1).....	55
第44図	土坑(2).....	56
第45図	RG01, 02, 03溝.....	57
第46図	RD16, 18土坑及び遺構外出土遺物.....	58
第47図	厨川柵, 竈戸柵擬定地周辺.....	65

I 遺跡の環境

1 遺跡の位置と地形

赤裳遺跡は盛岡市市街地の北西部、盛岡市西青山一丁目地内に所在し、北西に聳える岩手山を噴出起源とする大石波岩層雪崩堆積物^{註1)}で形成された、滝沢台地西辺部に立地する。滝沢台地は赤裳遺跡から約10 km 北北西の滝沢市滝沢の柳沢から、農林水産省岩手種畜牧場、滝沢牧野林、盛岡市のみたけ(観武)、青山町を経て、盛岡市前九年一、二丁目に至る広大な台地である。標高は滝沢市滝沢の柳沢で250 m~270 m、牧野林で153 m、盛岡市青山町で141 m、前九年一丁目の宿田遺跡で136 mとなっている。台地は北から南へ次第に高さを減じつつ拉がっており、台地の南西側から南側は半石段丘堆積物による低い段丘面を介して、南の半石川や西側の諸葛川の氾濫原へと移行している。一方、盛岡市前九年一丁目から安倍館町、上堂にかけては、滝沢台地東縁が北上川に面しており、そこは比高10 m~25 mの急崖となっている。滝沢台地の縁辺部は大小の沢が樹枝状に刻んでおり、これによって舌状台地が連続する地形となり、そこには縄文時代から中近世にいたる数多くの遺跡が立地している。赤裳遺跡もこうした遺跡の一つで、現在国立病院機構盛岡病院(標高142 m)のある青山一丁目から西側にやや下り、南西方向へ張り出した台地の南東側緩斜面に位置している。浅い沢地形を挟んで、西青山一丁目と二丁目の二つの台地にまたがっており、遺跡の標高は135 m~140 m、南側の中巻町からは2 mほどの比高差があるも、明瞭な段差はなく、遺跡全体の地形はなだらかな起伏を成している。遺跡の西側600 mに流れる諸葛川と遺跡との間は水田や住宅地が並び、台地西縁には、諸葛川から分岐した用水堰の小諸葛川が流れている。この用水堰は南東約1 kmの大館町遺跡西側を流れ、南の稲荷町遺跡の南側で再び諸葛川に注いでいる。さ



第1図 赤裳遺跡、関連遺跡位置図 (国土地理院5万分の1地形図「盛岡」「日詰」を縮小・加工した)

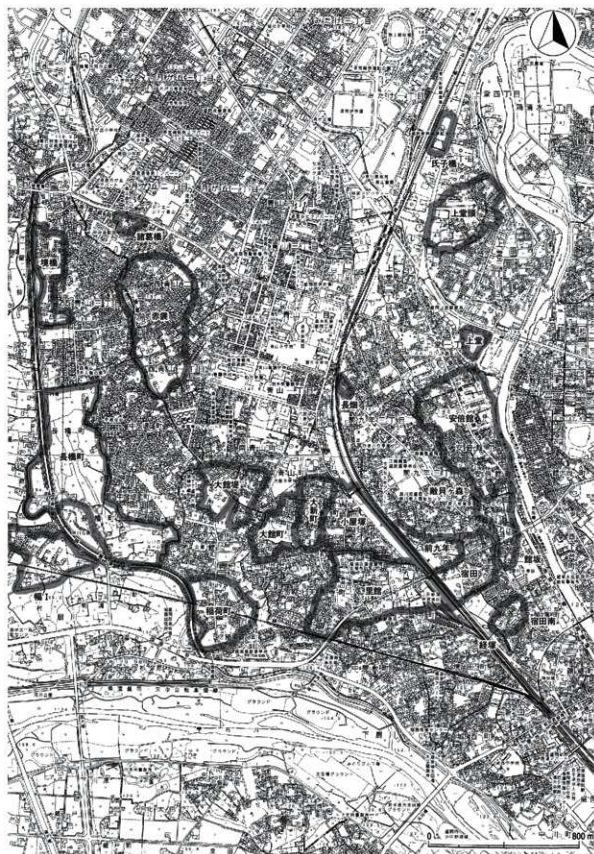
らに大館町遺跡から東に分岐した用水堰は、東に延伸されて天昌寺西側の堀を通じ、JR 東北新幹線盛岡駅東側の北上川へと注いでいる。

2 歴史的環境

滝沢台地上と、より低い雫石段丘面には、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古代の集落跡、中世城跡、近世集落跡が分布する。旧石器時代の遺跡は、滝沢台地南東端にある館坂遺跡で、洪火火山灰層中から石器が採集されているほか、縄文時代早期の土器も出土している。縄文時代草創期の遺跡は大新町遺跡と安倍館遺跡において爪形文土器が出土している。特に大新町遺跡では、縄文時代草創期から早期に至る濃密な遺物包含層が確認されており、早期の押型文土器や沈線文土器を出土する竪穴住居跡も複数確認されている。西隣の大館町遺跡は縄文時代中期を主体とする大規模な集落遺跡であるが、この遺跡からも縄文時代早期の遺物包含層が確認されている。ほかに前九年遺跡、宿田遺跡でも縄文時代早期から前期にいたる遺物包含層が確認されており、台地東縁の安倍館遺跡からも貝紋文土器や無文土器が出土している。前述の大館町遺跡では縄文時代中期の大規模な環状集落跡が存在し、平成 12 年（2000）11 月 24 日に岩手県史跡に指定され保存が図られた。この遺跡は大木 7a 式期から集落が形成されはじめ、大木 8a 式期から 8b 式期にかけて最盛期となり、大木 9 式期になると衰退することが明らかにしている。中期の集落はこのほかに、小屋塚遺跡、大新町遺跡、大館堤遺跡で確認されているが、集落の規模は大きくない。縄文時代後期になると明確な集落跡は確認されていないが、大新町遺跡で遺物包含層が形成されており、近傍に集落の存在が推定されている。縄文時代晩期については、大館町遺跡で遺物の散布が少量確認されている。弥生時代の遺跡は大館町遺跡の南辺で小さな石圍のある竪穴住居跡が 1 棟確認され、弥生時代前期の土器が出土している。

滝沢台地南端の宿田遺跡と少し南に離れた宿田南遺跡では、北海道系の後北 C2-D 式土器が出土している。また、安倍館遺跡外館からは、後北 C2-D 式土器と土師器小形甕が土坑から一緒に出土しているほか、近くから落石製の有孔円盤形模造品が採集されている。古墳時代の集落について、城戸ではまだ確認されていない。ただ宿田遺跡では、5 世紀ごろの土師器と黒曜石製ラウンドスクレイパーが出土したほか、7 世紀の古墳が 1 基確認され、主体部から鉄製の方頭大刀と小刀が出土した。この古墳の周辺からは 8 世紀を中心とする群集墳が確認されている。奈良時代になると大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡では集落が営まれ、集落は平安時代にも継続している。

平安時代の半ばの 10 世紀末から 11 世紀前半にかけて、安倍氏は陸奥鎮守府の右予官人として台頭した。胆沢、江刺、和賀、稗貫、斯波、岩手の奥六郡は、実質的には安倍氏の統治下に置かれるようになっていた。その拠点は岩手郡厨川にも置かれ、安倍頼良（新羅）子息の安倍貞任は厨川次郎を名乗っていた。前九年合戦を記した陸奥話記には、厨川柵、堀戸柵の二柵が登場し、古くから両柵は盛岡市厨川に存在したと考えられてきた。しかし、その遺跡について考古学的にはまだ明らかになっていない。この時代の市内の遺跡は大新町遺跡、大館町遺跡、小屋塚遺跡において、竪穴建物跡や土坑、掘立柱建物跡が確認されており、土師器の小皿や坏の破片、鉋跡き後内面黒色処理された高台付の坏が多く出土している。滝沢市の大釜館遺跡²²、八幡館山遺跡²³では、土師器小皿のほか坏が大量に出土しており、大釜館遺跡では土師器坏、小皿のほか内面黒色処理の高台付坏も存在する。また、岩手町の宿崎遺跡²⁴からも大釜館遺跡と同様の土器群が確認されている。これらの遺跡は安倍氏の拠点、または関連施設と推定されるものであり、盛岡市内ではほかに諸葛川沿いの境橋遺跡、赤装遺跡、稲荷町遺跡、北上川沿いの上堂頭遺跡や前九年二丁目の宿田遺跡、上田の高松神社裏遺跡などで、同じ内容の土器が出土している。滝沢台地上の遺跡は概ね台地縁辺部に分布していることが分かる。近年では 11 世紀の遺構遺物の集中と大館の字名から大館町、大新町、小屋塚遺跡付近に厨川柵を推定する意見²⁵、大館町遺跡から館坂・宿田南遺跡までの範囲のうち、宿田遺跡、館坂遺跡付近とする意見²⁶、さらには大館町、大新町、小屋塚遺跡付近を厨川



第2図 周辺遺跡分布図

欄とし、安倍館遺跡、館坂遺跡付近を堀戸欄とする意見¹¹⁾がある。本遺跡を含め、これら擬定地や周辺遺跡解明の後に、安倍氏の拠点扇川欄、堀戸欄の実態が明確となるであろう。安倍氏の滅亡後、奥六部を継承した清原氏は、扇川にも拠点があったと推定されるが、その遺跡は不明である。後三年合戦の後清原氏の遺領を受け継いだ藤原清衡は、江刺から平泉へと拠点を移し、奥羽二河を管掌した。平泉藤原氏の一族樋爪氏は斯波郡を本領としていたが、岩手郡もその影響下であったらしく、北奥地域もその影響下であったとする見解もある。稲荷町遺跡や里館遺跡¹²⁾では、堀を備えた居館や外郭施設が明らかになっており、このあたりに平泉藤原氏の拠点が存在した可能性が高い。

文治5年(1189)源頼朝は平泉藤原氏を滅まし、9月11日から18日まで扇川に滞在した。9月12日には甲斐の御家人工藤小次郎行光が岩手郡地頭を拝命し、胚酒宛飯を献じた¹³⁾。以後工藤氏は扇川を拠点に岩手郡を統治したが、岩手郡地頭職は鎌倉時代のある時期から北条氏へと移っていた。鎌倉時代の工藤氏の拠点が何処に存在したのかは明確ではないが、里館遺跡には13世紀から14世紀の遺物も散見される。雫石川の南岸の太田郡遺跡には、13世紀後半から14世紀前半の大形で不整形の居館が営まれる。また詳細な年代は不明ながら、宿田南経塚は中世の可能性のある礫石経塚である。こうした一連の遺跡は鎌倉時代以後の岩手郡を明らかにする上で重要な遺跡である。元弘3年(1333)鎌倉幕府が滅亡すると、岩手郡の多くは元弘没後地となったらしい。岩手郡仁王郷は現在の盛岡市中心市街地付近であるが、この地の三分の二の領有をめぐって南条清時と後藤基泰が争っていた¹⁴⁾。鎌倉時代の南条氏と後藤氏は共に北条氏の有力被官であったが、共にその後岩手郡に存続した形跡がない。室町時代の仁王には甲斐源氏を出自と伝える福士氏が入っている。一方扇川の工藤氏は、鎌倉時代に岩手郡地頭職を失った後も、扇川に存続したと伝えられる¹⁵⁾。しかし元弘の乱以後の度重なる戦乱によって、次第に勢力を縮小し、わずかに扇川村のみの領有となっていた¹⁶⁾。鎌倉時代から斯波(紫波)郡は足利氏の領地であった。南北朝時代は斯波郡、稗貫郡ともに北朝勢力であり、斯波郡高木寺は足利氏の拠点であり続けた。室町時代の応仁、文明の乱以後、足利将軍家の権威は失墜したが、斯波郡高木寺の斯波氏は戦国時代まで岩手郡にも勢力を及ぼしている。天文14年(1545)には岩手郡滝石(雫石)と猪去に一族を配置し、雫石御所、猪去御所と称された。このころ扇川の工藤氏や不来方の福士氏が属していた可能性もある。糖部の南部氏がこの地方へ本格的に侵攻してくるのは天文年間(1532-1555)以後で、天正14年(1586)から天正16年(1588)7月にかけて南部信直が斯波直直を攻略している。天正18年(1586)南部信直は秀吉から南部七郎本領安塔の朱印状を交付された。翌天正19年(1591)九戸政実の乱を豊臣秀吉の再仕置により平定し、軍監豊野長吉の助言によって不来方への移転を決意した。不来方は盛り上がり栄える岡の意味から盛岡と改称され、南部信直、利直は福岡城(旧九戸城)を居城としながら盛岡城を築城した。寛永10年(1633)南部重直の入城以来、明治の廃藩置県に至るまで盛岡城が盛岡南部氏の居城であり、城下は盛岡藩領の中心として栄えた。

- 註1 土井寛夫 2000年3月「滝沢村文化財調査報告書第32集「岩手山の地質—火山灰が語る噴火史—」滝沢村教育委員会
- 2 滝沢村教育委員会 2003年3月「大釜館遺跡発掘調査報告書—滝沢村区画整理事業遺跡発掘調査—」滝沢村教育委員会
- 3 室野秀文、井上雅孝、神原雄一郎 1995「八幡館山遺跡について」『岩手考古学』第7号 岩手考古学会
- 4 高橋昭治、八木光則 1994「岩手町沼崎遺跡出土の土器」『岩手考古学』第6号 岩手考古学会
- 5 羽柴直人 2011年3月「東日本初期武家政権の考古学的研究—平泉勢力圏の位置づけを中心に—」総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻
- 6 盛岡市遺跡の学び館 2012「第11回企画展 検証 扇川欄—古代末期のもりおか—」
- 7 盛岡市遺跡の学び館 2014「里館遺跡第58次発掘調査報告書」工藤善哉、盛岡市教育委員会
- 8 『吾妻鏡』文治5年(1189)9月12日の条
- 9 小笠原謙吉 1941「第一章沿革編第五節中世史」『岩手郡誌』岩手県教育会岩手郡部会
- 10 田中喜多美 1951「第四章吉野期」『盛岡市史第二分冊中世期』盛岡市
- 11 『奥南藩郷録』
- 12 同
- 13 樋口知志 2016「前九年合戦」「前九年・後三年合戦と兵の時代」吉川弘文館

Ⅱ 調査経過

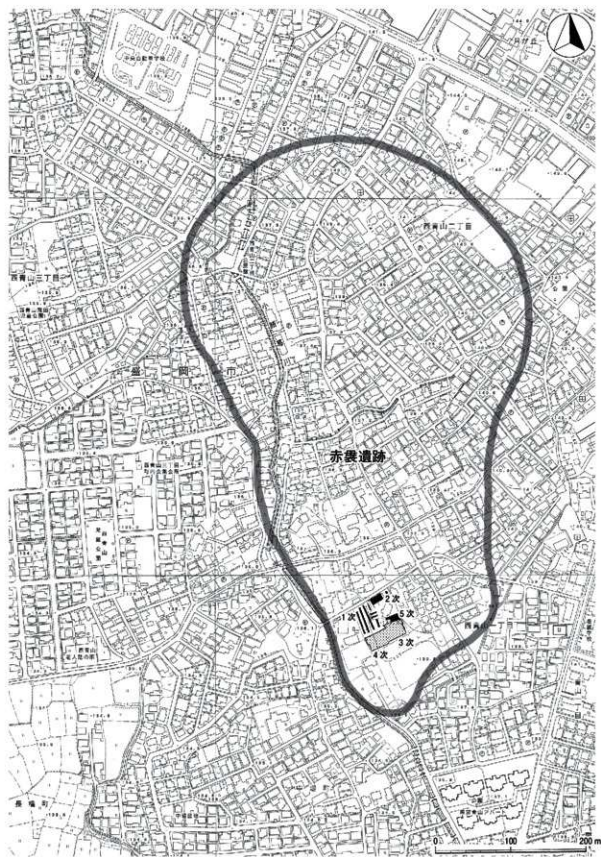
赤嶽遺跡の発掘調査は平成12年度(2000)以後5回実施され、全て開発に伴う緊急発掘調査である。第1次調査は平成12年9月27日、宅地造成に先立ち実施した試掘調査で、調査地点は後述する第4次発掘調査の北西側である。縄文時代の陥し穴、平安時代の土坑と柱穴、近世掘立柱建物跡が確認された。調査結果により盛り土して遺構の保存を図ったうえで共同住宅を建築している。第2次調査は平成26年(2014)に第1次調査の北東側地点を宅地造成に先立ち試掘調査を実施したが、遺構、遺物ともに確認されなかった。この時、後に第3次、第4次調査区となる畑地に、平安時代後半の土器破片が濃密に散布していることが確認された。

平成26年5月13日、個人住宅及び農作業小屋を建築する目的で発掘届が提出された。同年10月14日～16日の試掘調査の結果、平安時代後半の土坑や古代以後の溝、柱穴などが確認され、平安時代後半の土器が大量に埋蔵されていることを確認した。遺構の分布範囲は開発予定地の全体に及んだため、地権者と協議の上、本発掘調査は平成26年度と平成27年度の2カ年にわたり実施することになった。平成26年度は敷地の北東側約半分について本調査を実施した。調査の結果縄文時代土坑2基、平安時代掘立柱建物跡4棟、土器焼成土坑1基、粘土探掘坑1基、平安時代以後の柱穴、溝2条、土坑3基があり、土器焼成室からは多量の土器類が出土した。調査期間は10月14日から同年12月25日まで、調査面積は578㎡である。平成27年度は南西側の部分を発掘調査している。調査の結果平安時代竪穴建物跡1棟、土器室2基、土坑3、粘土探掘坑4、柱穴1が調査された。第3次、第4次調査で出土した土器は、その特徴から平安時代後期の安倍氏に関連する土器生産遺跡として調査当時から注目された。調査期間中の平成26年12月10日、平成27年6月27日には発掘調査現地説明会を開催し、市民に調査成果を公開した。また平成27年7月11日の岩手考古学会(第47回研究大会)で調査速報を発表した。平成27年2月7日から5月17日と平成28年2月6日から同年5月15日には、盛岡市遺跡の学び館において埋蔵文化財調査資料展「盛岡を発掘する」を開催し、写真パネルと出土遺物を展示公開した。さらに同展示期間中の平成27年3月8日と平成28年3月6日には各年度の発掘調査成果を発表した。

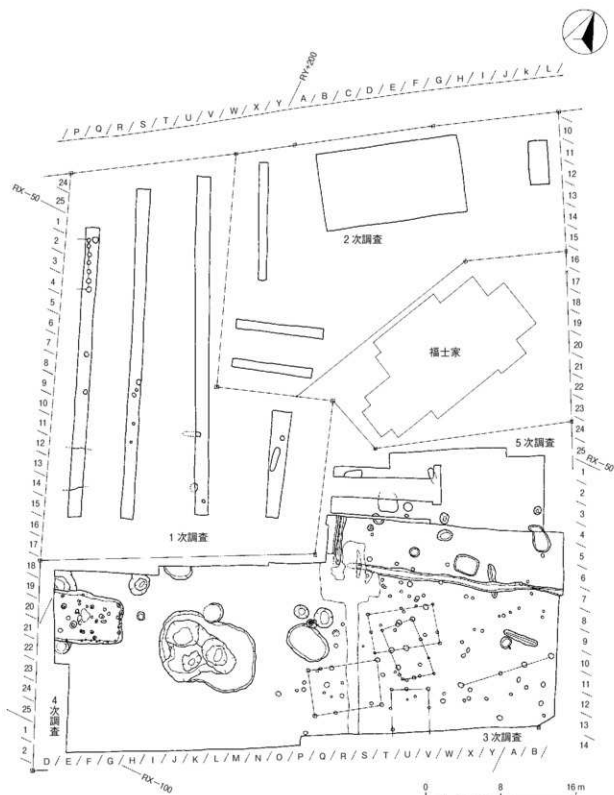
調査成果の整理作業及び報告書の作成作業は平成26年度の12月25日から開始し、平成29年度末まで作業を継続した。平成30年3月28日に本報告書を刊行した。

表1 赤嶽遺跡発掘調査一覧

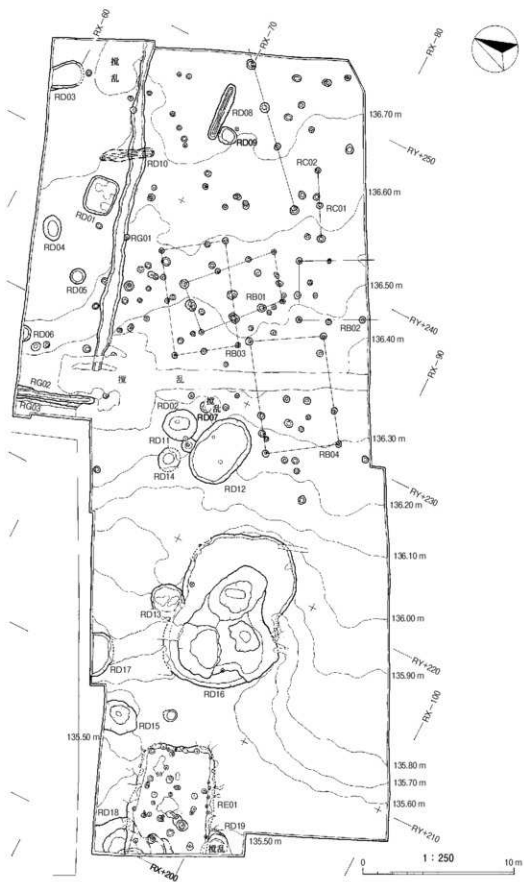
次	所在地	調査原因	調査期間	調査面積	調査成果	措置
1	西青山一丁目22番1	共同住宅	2000.9.27	173㎡	縄文土坑2、平安以後柱穴10、土坑1、近世掘立柱建物1	掘削制限 工事実施
2	西青山一丁目23番地	宅地造成	2014.5.13～15	207㎡	遺構・遺物なし	工事実施
3	西青山一丁目21番、16番2	個人住宅	2014.10.14～ 2014.12.25	578㎡	縄文土坑2、平安掘立柱建物4、土器室1、粘土探掘坑1、柱穴、近世土坑、溝	工事予定
4	西青山一丁目21番、16番2	個人住宅	2015.5.11～ 2015.6.30	510㎡	平安竪穴建物1、土器室2、土坑3、粘土探掘坑4、柱穴	工事予定
5	西青山一丁目21番	個人住宅	2017.6.28	94.3㎡	時期不詳土坑3	工事予定



第3図 赤農遺跡全体図



第4図 発掘調査区及び調査グリッド配置図



第5図 調査区遺構全体図

Ⅲ 調査成果

1 基本層序と遺構確認状況

今回の調査地点は遺跡南東部にあたり、南東側へ緩やかに傾斜している。この場所は調査直前までは野菜畑であり、調査区の中央部から南西部にかけての地表には、平安時代後期の土師器の破片が大量に散布していた。基本層序は地表からⅠa層（暗褐色ないし黒褐色の耕作土）、Ⅱ層（黒色土ないし黒褐色土）、Ⅲ層（褐色土ないし黄褐色土）、Ⅳ層（黄灰色土）の順に堆積している。Ⅲ層以下の土層は地山で締りがあり硬い。大半の箇所では耕作土直下がⅢa層の上面にあたり、Ⅱ層は地形の低みや大きな土坑の上面に残存している。遺構検出面の標高は、調査区北東隅で136.7 m、調査区南西隅で135.5 m～135.6 mで、概ね平坦ではあるも南西側へ緩やかに傾斜している。調査区の中央部から南西部にかけては、長芋や牛蒡などの作付けによって深く攪乱されており、その深さは遺構埋土や床面、底面にまで及んでいた。このため表土除去を重機で行った後、人力での遺構確認作業で遺構と攪乱部分の範囲を確認。次に攪乱部分を隔々まで手作業で掘削してから遺構検査に入った。その結果、縄文時代の土坑3基、平安時代後期の竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡4棟、平安時代後期またはそれ以後の土坑17基（土取り穴を含む）、近世以後の溝3条などが確認された。古代の土坑の中には土器焼成土坑3基と土取り土坑5基を含んでおり、調査地点は当該時期の土器生産遺跡であることが明らかになった。

2 遺構と遺物

RE01 竪穴建物跡・RD20 土器焼成土坑（第6図～第30図）

RE01 竪穴建物の廃絶後に、竪穴部分を活用してRD20 土器焼成土坑が形成されている。両遺構は規模やプランを踏襲した連続する遺構であることから、一括して記述し説明する。

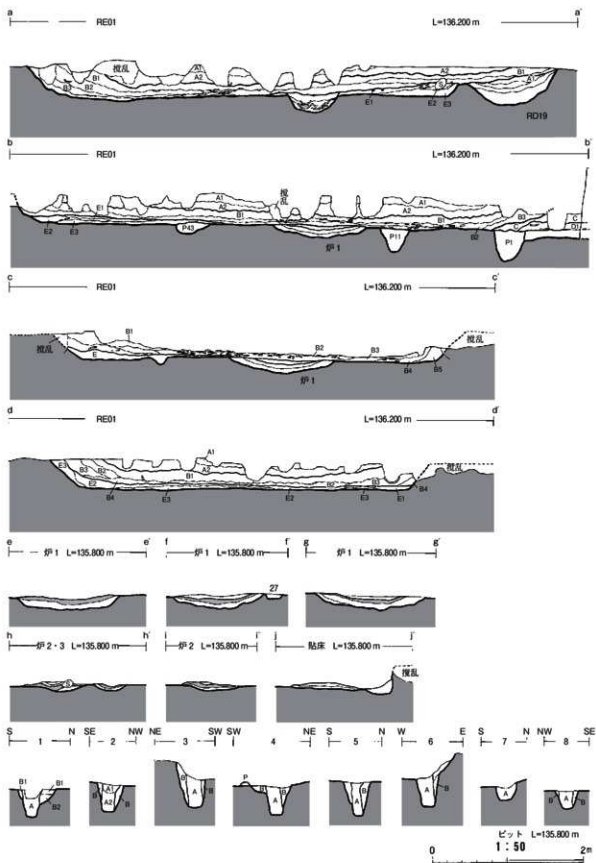
プランと規模 調査区西端に確認された竪穴建物跡で、表土直下の暗褐色土Ⅲa層上面で確認された。竪穴の西壁は調査区外であるほか、全体に耕作による攪乱が著しい。竪穴の規模は確認部分で西南西から東北東に7.18 m、南南東から北北西に4.85 m～5.6 mを計る。竪穴の壁高は北壁が39 cm、東壁が18 cm、南壁が17 cm～21 cm残存し、竪穴床面は黄褐色土のⅢb層を掘り込んでいる。竪穴西壁は調査区外で未確認であるが、竪穴西部の埋土堆積状況から調査区西壁の近至と推定され、後述する炉1が竪穴の中央部とするならば、竪穴の全体規模は長軸8.1 m～8.27 m、短軸4.85 m～5.6 mであり、東壁側がやや狭い形の隅丸長方形プランとなる。主柱穴の配置はP1～P6で構成される2間×1間の配置で、東妻のP3とP6は竪穴の東壁に接している。竪穴の主軸方位はN112.5°Wを示す。竪穴南壁西寄りには、張り出しが存在するが、西側を大きく攪乱されており、張り出しの詳しい形状と規模は不明である。遺構の重複状況はRD18土坑の南側を本竪穴建物で削平し、RD19土坑の上面を本竪穴建物の張り出し部が削平している。またこの竪穴建物は竪穴東側中央部から竪穴南半部を貼床（E層）しており、貼床の上面はスロープ状に南側張り出しの面へと連続している。このE層下の地山の床面を1期（第6図）、E層上面の床面を2期（第7図）とする。貼床の範囲は炉1の南端部に及んでいる。この2期竪穴建物廃絶後の竪穴中央部には、大量の土器が集積され土器溜りが形成されて、周囲の壁際に焼土と炭化物が分布していた。これがRD20土器焼成土坑である（第9図）。焼土は竪穴の西側に多く形成されていた。RD20土器焼成土坑は竪穴の窪みをそのまま活用して、多くの土器を焼成したことが明らかになった（第6図～第9図）。

埋土と変遷 RE01 竪穴建物跡とRD20土器焼成土坑は連続する遺構であるため埋土については一括して説明する。

- Ⅰa層 黒色土主体（10YR2/1シルト質植土に10YR3/2シルト質植土が10%混合し粉状、密で硬い）



第6図 RE01 竪穴建物跡 (1)



第 7 図 RE01 竪穴建物跡，RD20 土器焼成土坑土層断面図 (1)

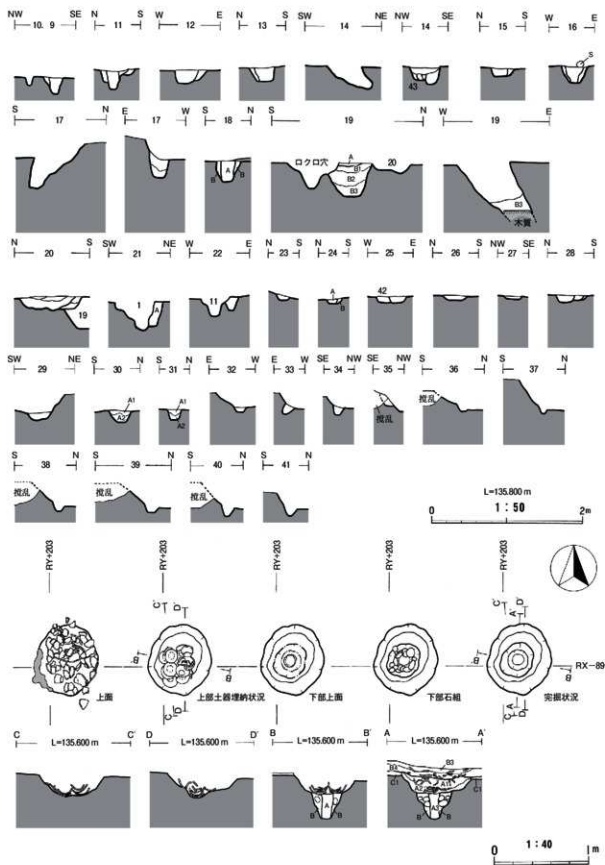
- A2層 黒色土主体 (10YR2/1 シルト質植壤土に10YR3/1 植壤土5%、10YR3/2 植壤土5% 混合し粉～粒状 密で硬い)
- B1層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に10YR4/3 シルト質壤土3% 混合し、やや密でやや硬い)
- B2層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に5YR4/4 焼土5%、7.5YR3/3) シルト質壤土5% 混合し粉～粒状 やや密でやや硬い)
- B3層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に10YR4/3 シルト質壤土5% 混入し粉状～粒状～粒状 やや密、やや硬い、炭化物含む)
- B4層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に7.5YR4/4 焼土3%、10YR4/3 シルト質壤土3% 混合し粉～粒状 やや密、やや硬い、炭化物含む)
- B5層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に10YR4/4 シルト質壤土7% 混合し粉～粒状 やや密、やや硬い、炭化物含む)
- C層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に5YR5/4 焼土25% 混合し粉～粒状 やや密で硬く炭化物含む)
- D1層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に5YR5/4 焼土40% 混合し粉～粒状 やや密、やや硬い)
- D2層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に7.5YR4/4 シルト質壤土5% 混入し粉状 やや密、やや硬い)
- E1層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に10YR4/2 粘土10% 混合し粒状 やや密でやや硬い)
- E2層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に10YR5/2 粘土40%、7.5YR4/3 焼土10% 混合し、粒～塊状 やや密でやや硬い)
- E3層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質植壤土に10YR5/2 粘土30% 混合し粒～塊状 やや密でやや硬い)

このうちA層、B層は自然堆積層であり、特にA1層は遺構外の低みに残存するII層に近似する。また、C層とD層は竪穴西部の壁近くに堆積した土層で、熱の浸透による焼土化、あるいは焼土粒が多く含まれる土層である。遺構精査の初段階ではこの土層が竪穴の西壁になる可能性を考えて、西側に古い別遺構を想定しながら掘り下げていたが、明確な壁面の立ち上がりを確認できず、1期と2期の変遷では竪穴プランの変更は認められなかった。E層は1期の床面の上に盛られた灰白色粘土の粒や塊を多く含む貼床で、この上の面が2期の床面である。

1期床面からの出土遺物は後述する。

柱穴 柱穴及び柱穴状の穴は41口確認されている。このうち支柱穴のNo.4柱穴は貼床(C層)の掘り下り途中から穴の形状が確認できたが、他の柱穴については地山の床面上にて確認した。このことから支柱穴は2期まで継続した可能性があるが、その他の柱穴ないし柱穴状の穴を1期と2期に峻別することは極めて困難である。また1期の北東隅には、E層よりも下層に径1.4mの貼床が存在する。柱穴のうち支柱穴のP1～P6は径28cm～40cm、深さは28cm～35cmあり、径12cm～18cmの丸い柱痕跡が認められる。柱痕跡(A層)は黒褐色土主体、掘り埋土(B層)は黒褐色土と褐色土の混合土である。P14、P17、P19は斜めに掘り込まれており、P19の底には径28cmの丸柱の下部が残存しているが深い位置のため取り上げていない。P20は炉1の一部とP19を掘り込んでいるが、穴の形状から柱穴ではない。後述する轆轤穴はE1層上面から掘り込まれており、2期のものである。1期の床面はほぼ平坦であるが、いわゆるタタキのような硬化面は認められない。また、No.23、29、33～41柱穴が壁沿いに配置されているが比較的低く、壁際の腐蝕は認められていない。

柱穴からの出土遺物はP8の柱痕跡から第30図603の刀子破片、P22の埋土から第30図605の鉄製紡錘車が出土している。1期床面の遺物は第11図6の土師器杯、7～10の土師器高台付杯、11～17の土師器小皿、第29図584～586のミニチュア土器、第30図601、602の鉄製刀子が出土している。ミニチュア土器3点は回転糸切後内外ヘラミガキと体部下端をヘラケズリし、内外黒色処理されている。また床面からは第30図611、612の葎打痕、または葎打痕と摩擦



第8図 RE01 竪穴建物跡土層断面図 (2), 轆轤穴

痕のある石が出土している。

炉 炉は中央部の炉1のほか、北東部の炉2、炉3、東側中央の炉4、炉5がある。このうち炉1～3は床面を浅く掘り込み、内部に黒褐色土と黄褐色土の混合土を詰め、その上面に火熱浸透による焼土が形成されている。炉1は東西1 m、南北1.2 m、深さ13 cmの不整形の掘り込みがあり、この南西部をP20に切られている。また貼床のE層に炉1南端の一部を覆われている。焼土は径92 cm、厚さ5 cm～8 cmの硬い赤褐色焼土の浸透が確認された。焼土の上にはにぶい黄橙色ないし黄灰色の灰に赤褐色の焼土粒が混入し堆積している。炉1の下部掘り込みの埋土からは第11図4、5の小皿破片が出土している。

炉2と炉3は、堅穴北東部隅のやや低くなった床面上に径1.3 m内外の黄褐色土の貼床があり、その上面からごく浅い皿状の掘り込みを行って土を詰めた上に明るい赤褐色の浸透焼土がある。炉2はP18の一部を覆い、P15に切られている。炉2、3ともに下部の掘り込みからの出土遺物はない。炉2の上面には黒褐色土と焼土の混合土が堆積している。

炉4と炉5は径20 cmほどの円形の焼土が連なるものである。床面表面のみ薄く焼土が形成されたもので、熱の浸透による焼土は深いところでも2 mm～3 mmである。

轆轤穴 (第6図、第10図、第17図～19図) 炉1とP19南側に確認された轆轤を掘り付けた痕跡で、轆轤そのものは残存していない。E1層上面より1期の床を掘り込み、P19とP20を切っている。穴の径は62 cm～72 cmの楕円形で、穴の深さはE1層の上面から50 cmである。穴の上面を堅穴埋土B4層が覆っている。穴の上面西側縁辺部には薄い焼土が確認された。穴は形状と埋土から上部と下部に大別される。穴の上部は鍋底状を呈し、62 cm～72 cmの楕円形で深さ20 cm～24 cmある。内部のA1層とA2層は黒色土と暗褐色土や褐色土、焼土の混合土で、第15図134～153の土師器等は3個体ないし4個体程度正位で重ねたものを並べて埋納され、上をA1層、A2層で覆っていた。ほかにA2層からは第15図154の土師器高台付坏と155の土師器小皿が出土し、A1層からは第15図156～第17図189の土師器坏。第17図190～194の土師器高台付坏、第17図195～206の土師器小皿が出土している。土師器小皿には198～201、204～206などのように重なりが形状のものも多く見られる。穴の下部は径33 cm～38 cmの楕円形で深さ28 cm、底部の径は11 cmないし12 cmで穴の形状は漏斗状である。A3層は轆轤の回転軸の痕跡で、径12 cmの円形の軸であり、黒色土主体の上に暗褐色土粒がわずかに混入する。B層は径4 cm～10 cm大の川原石または破砕した礫21個を軸と壁の間に充填し、礫や石の間に灰褐色ないし鈍い褐色の粘土で軸を固定している。石のほとんどは被熱して脆い。穴の下部からの出土遺物はない。

土器溜り 堅穴と土坑のほぼ中央部、炉1に重なる位置に径2.2 m、厚さは6 cm～8 cmに多数の土器が集積されている。その堆積は埋土B3層からB2層に及んでいる。周囲のE層上面からD層、C層にかけて焼土や炭化物が多く確認された。土器溜りは土器溜りB3層とB2層に分層して取り上げているが、これは埋没過程で土器片の隙間にB3層からB2層の順に土が流れ込んだもので、実際の土器溜りは一括で集積されたものと把握される。土器については後述する。

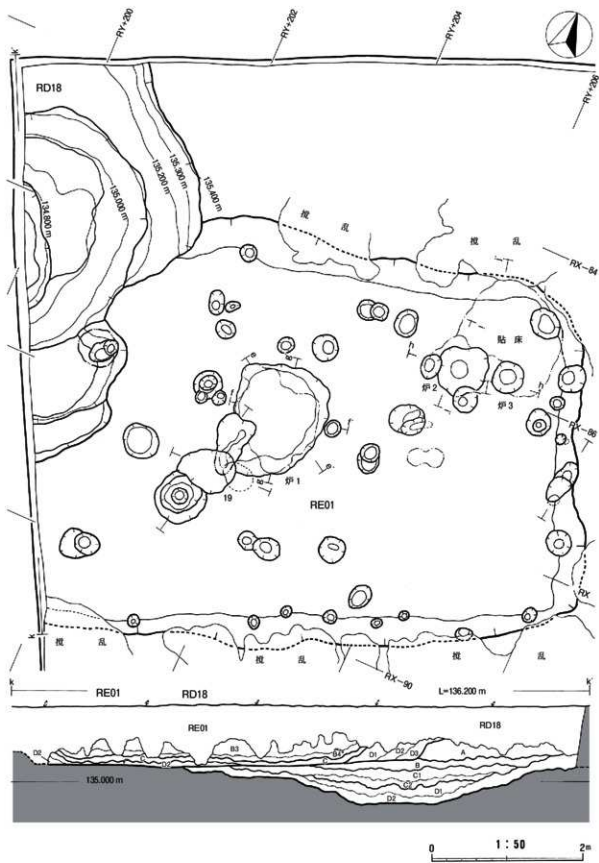
出土遺物

E層の内E2層からは第11図18～35、第12図36～53の土器、591の穿孔のある石製品が出土している。このうち第11図18～21は土師器ロクロ坏、22～33は土師器内面黒色処理の高台付坏、34と35は大型の坏または鉢と見られる底部高台、第12図36～47は土師器ロクロ小皿、48の土師器小型甕、49、50の土師器甕は輪積み整形で体部外面に粗いヘラケズリがある。51～53は須恵器大甕破片で、鈍い紫灰色に焼かれており、外面タタキで薄い自然釉が分かる。

E1層からは第12図54～第13図76の土師器ロクロ坏、77～88の内外または内面黒色処理の土師器高台付坏、89から第14図116のロクロ小皿、117の内外黒色処理の鉢、118の土師器甕が出土している。土師器甕は輪積み整形でロクロを用いていない。第14図119～133はE層中出土の土器で、119～121はロクロ坏、122はロクロの高台付坏で炭化物が付着するもの。123は内外ヘラミカキで黒色処理の高台付坏、124は内面黒色処理の高台付坏底部、124～132はロ



第9図 RE01 竈穴建物跡 (2), RD20 土器焼成土坑



第10図 RE 竪穴建物跡 (3), RD18 土坑

クロ小皿である。このほかE層からは第29図593の土製甕子。E2層から第30図600の鉄鏝。E1層からは604の鉄製刀子茎と608の鉄鏝茎。E層上面からは第30図610の棒状鉄製品が出土している。

D層とC層は坪1よりも西側の壁際に形成された、焼土や炭化物を多く含む土である。この土層は南東部の一部でE層を覆っているが、中央の土器溜りとは重複せず、C層上面は土器溜りの下面に連続する。

D層からは第17図207～209の土師器杯、同210～第18図219の土師器高台付杯、220～232の土師器小皿、233～237の土師器小形器台が出土している。このうち土師器高台付杯は211と215は内外ヘラミガキと黒色処理されており、外は内面ヘラミガキと黒色処理である。

C層からは第18図238～240の土師器杯、同241～第19図253の土師器高台付杯、254～263の土師器小皿、264の本葉痕のある土師器甕底部が出土している。土師器高台付杯のうち247は内外ヘラミガキと黒色処理であるが、他は内面ヘラミガキと黒色処理となっている。B5層とB4層からはごく少量の土師器破片が出土している。

土器溜りB3層からは265～270の土師器杯、271の内外ヘラミガキの土師器杯、272～277の土師器杯、278～280の土師器小皿が出土している。

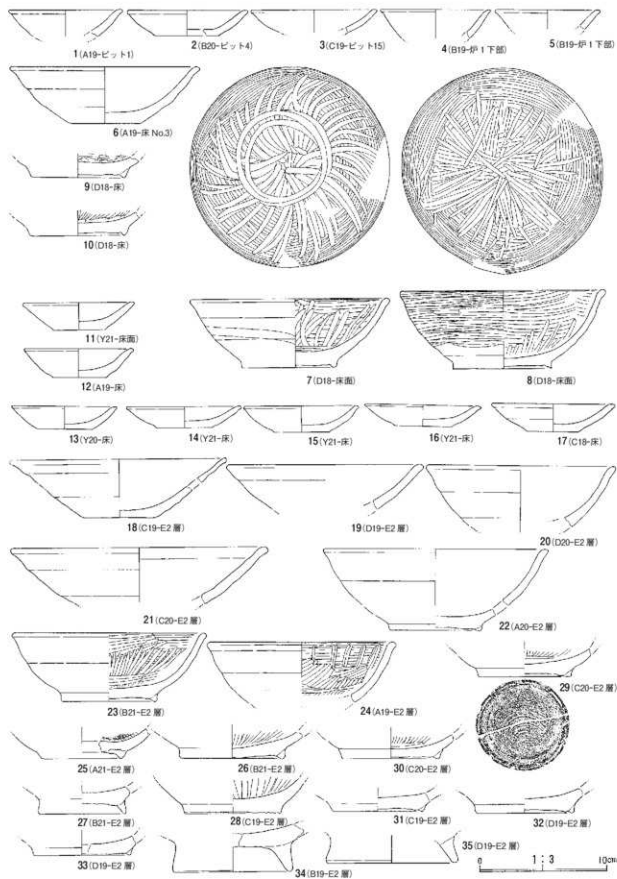
土器溜りB2層からは282～第21図327の土師器杯、328、329の土師器高台付杯、330～第22図362の土師器小皿が出土している。小皿のうち363～365は手捏ねの小皿であるが、364は口縁部が直立する器形で輪軸整形され、底部回転切り離し後に手捏ねで器面に凹凸を付け調整している。

B3層からは第22図366、375の土師器杯、376～379の内面黒色処理土師器杯、380の高台付杯、381～第24図395の内面または内外黒色処理の土師器高台付杯、396の大型の杯または鉢と見られる土師器高台付底部、399の小形器台、400～417の小皿が出土している。

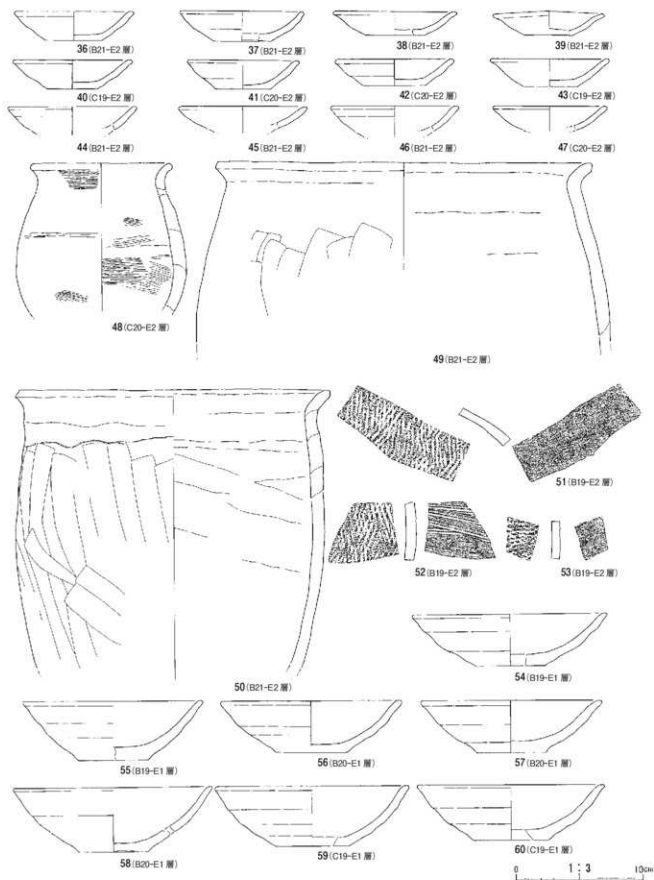
B2層からは第24図418～第25図452、第26図461～466、468～471の土師器杯、453～460の内面黒色処理の土師器杯、472～第27図486の内面または内外黒色処理の土師器高台付杯で、477の底部高台内には施による刻書がある。487～489の小形器台、490の小形土器、491～526の小皿、427の内外ヘラミガキ黒色処理の大形鉢、528の小形甕が出土している。小皿の内525は割れ口を寛で撫でつけたような痕跡が残る。526は外面に縄状の痕跡がある。また図示していない円形定形の鉄滓（第19図版）が1点出土している。529～第28図572はB層から出土した土器である。このうち第27図529～第28図539は土師器杯、541、542は高台付杯、540、543～546は内外あるいは内面をヘラミガキし黒色処理した土師器高台付杯、547～573は小皿で、572は歪んだ小皿の底部である。

A層の遺物出土量は、激しい攪乱のためか、B層以下よりも少ない。図示できたのは第28図573の小皿と第30図603の刀子破片のみである。

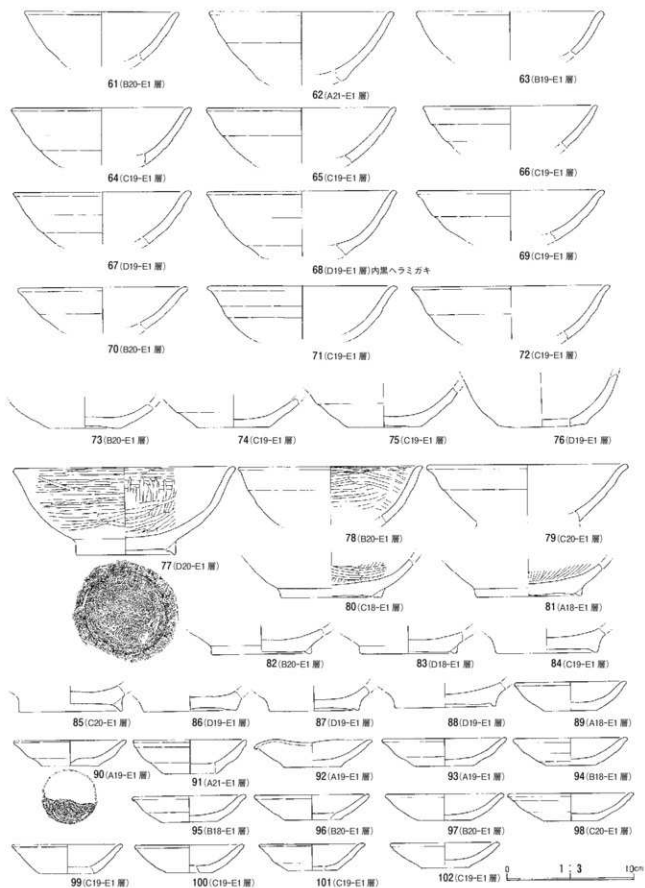
RE01 竪穴建物跡とRD20 土器焼成土坑の攪乱部分から第29図574～583の土器が出土した。574、575、577は土師器杯、576、578、579、581は高台付杯、または高台部分である。580～583は小皿である。また、竪穴建物精査中の排土の中から第29図592の礫石を採集している。全体に強く被熱して赤褐色になっている。



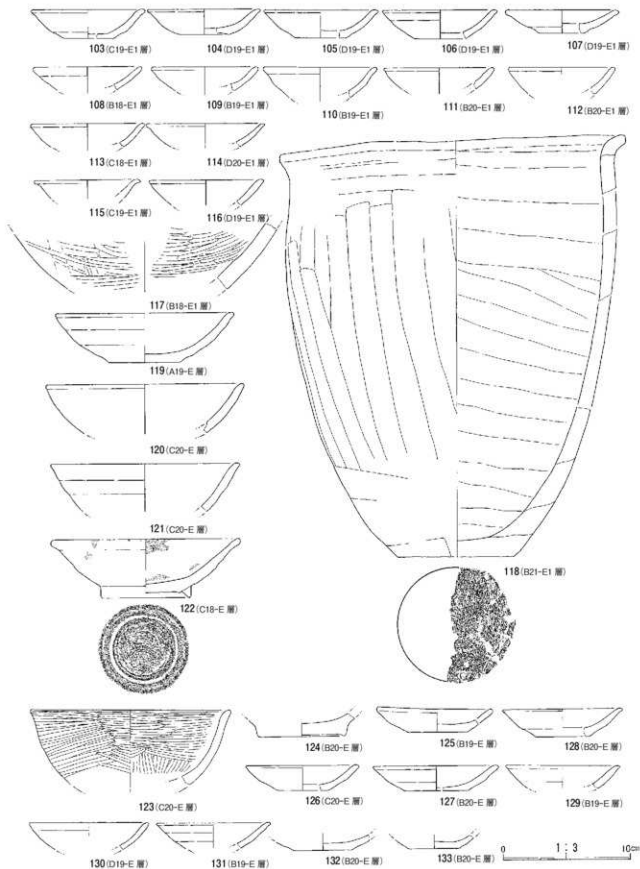
第11図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (1)



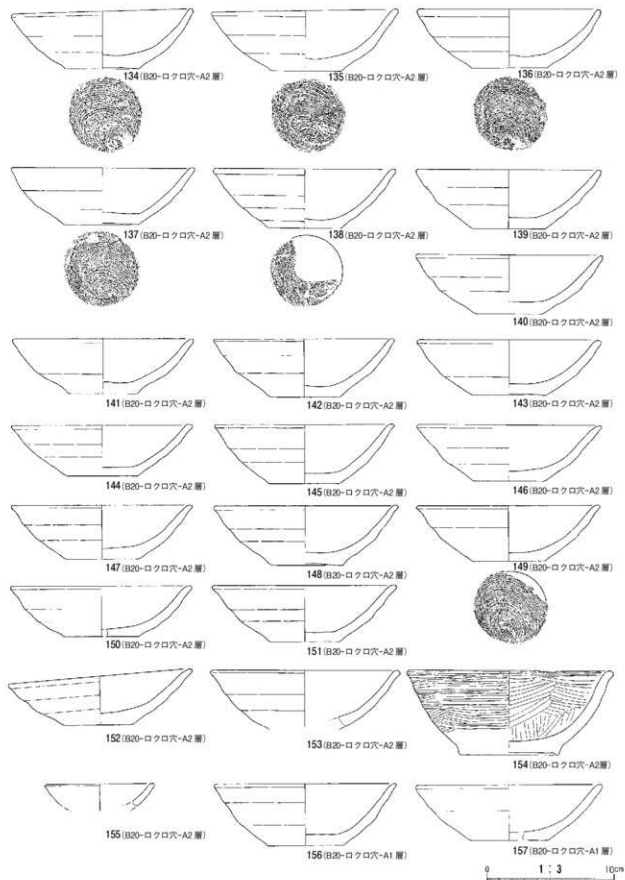
第 12 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (2)



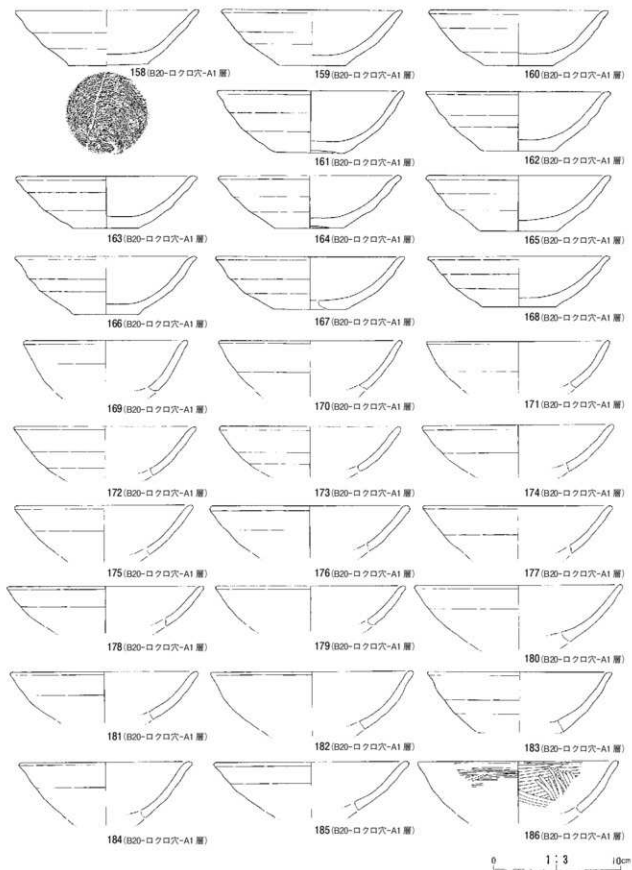
第13図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (3)



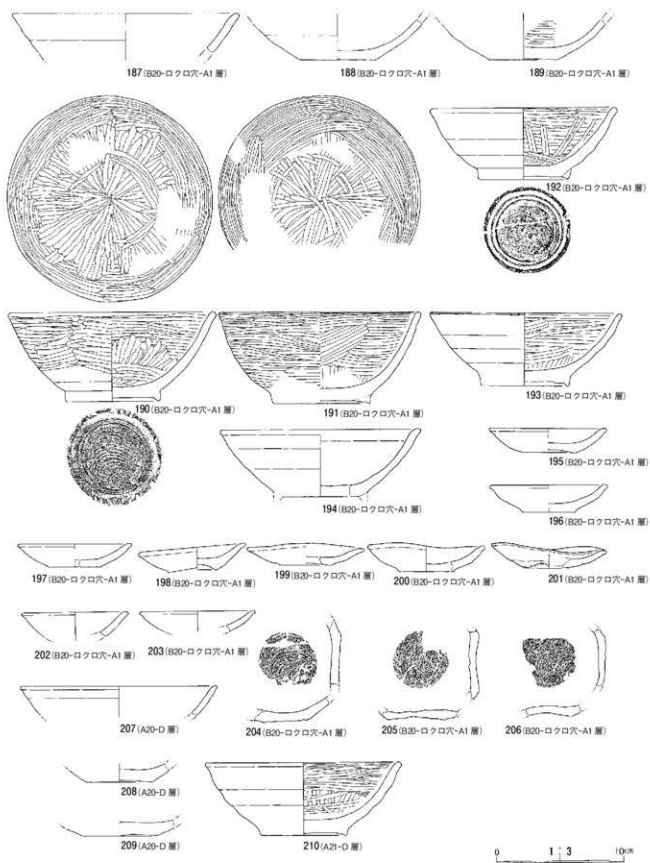
第14図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (4)



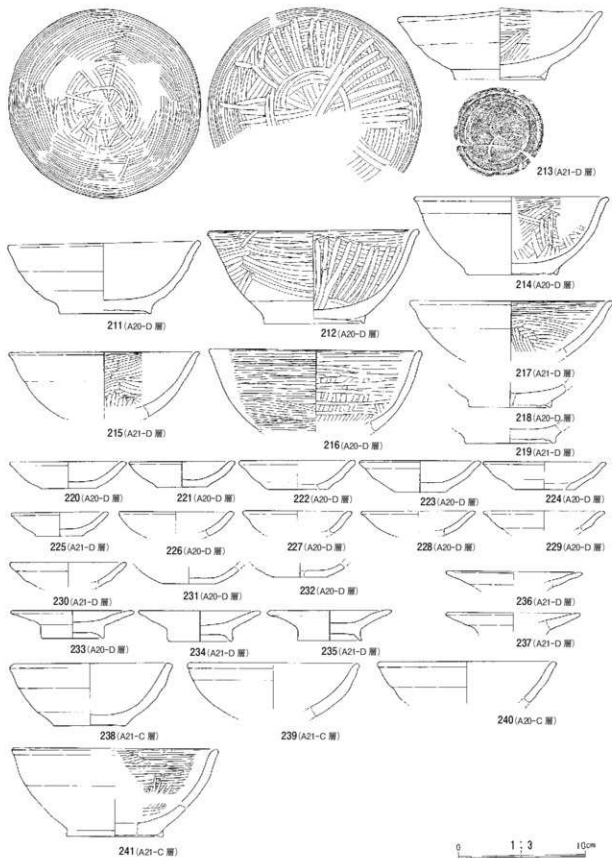
第15図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (5)



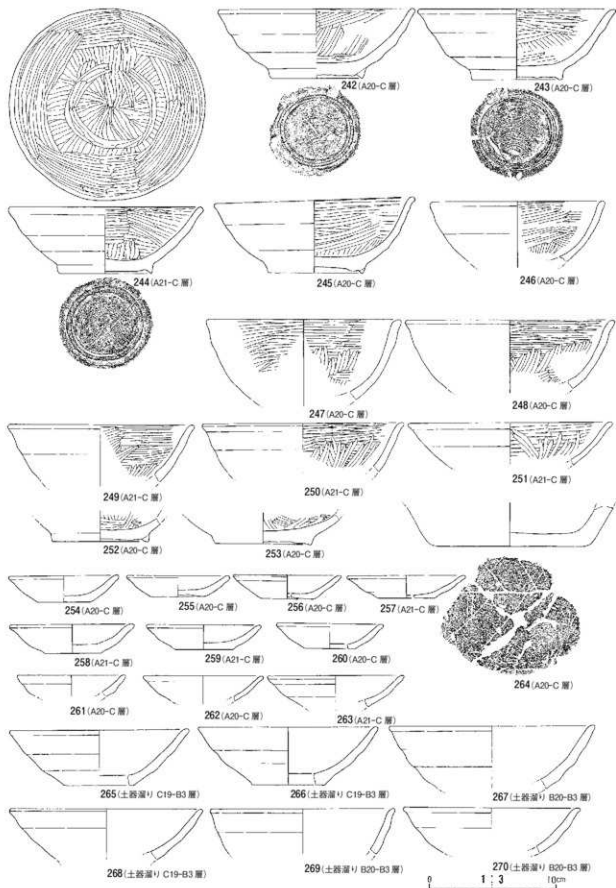
第 16 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (6)



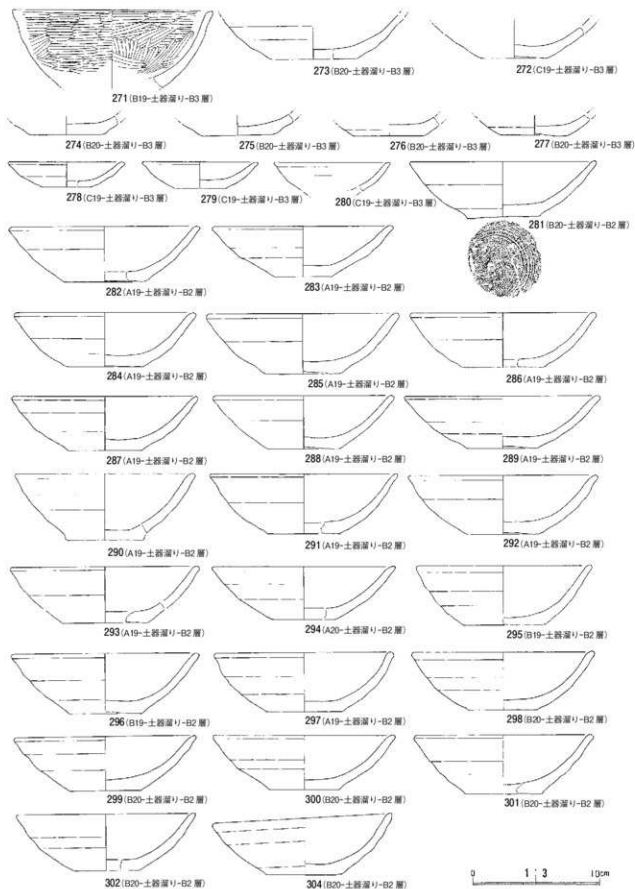
第 17 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (7)



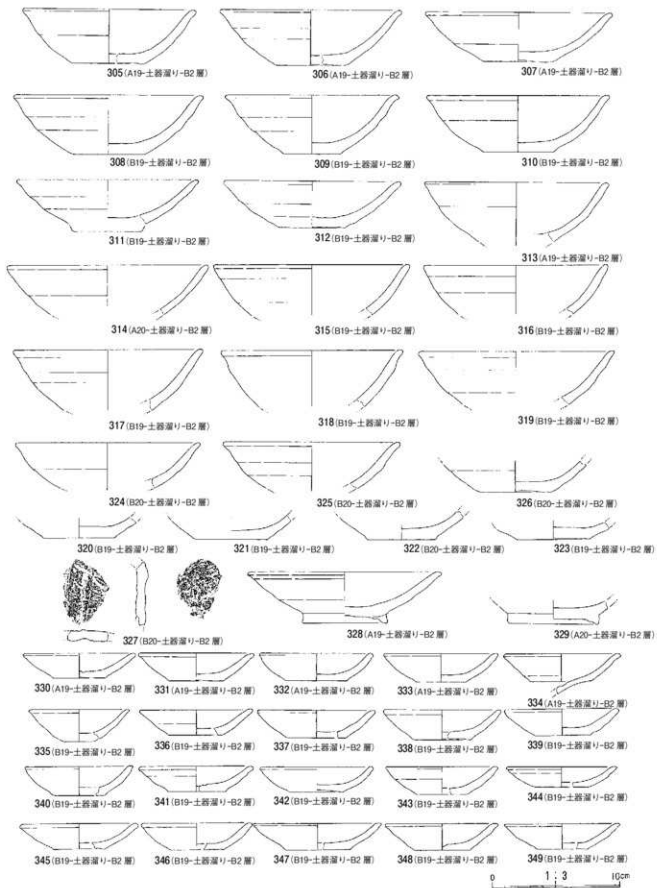
第 18 図 RE01 竖穴建物跡出土土器 (8)



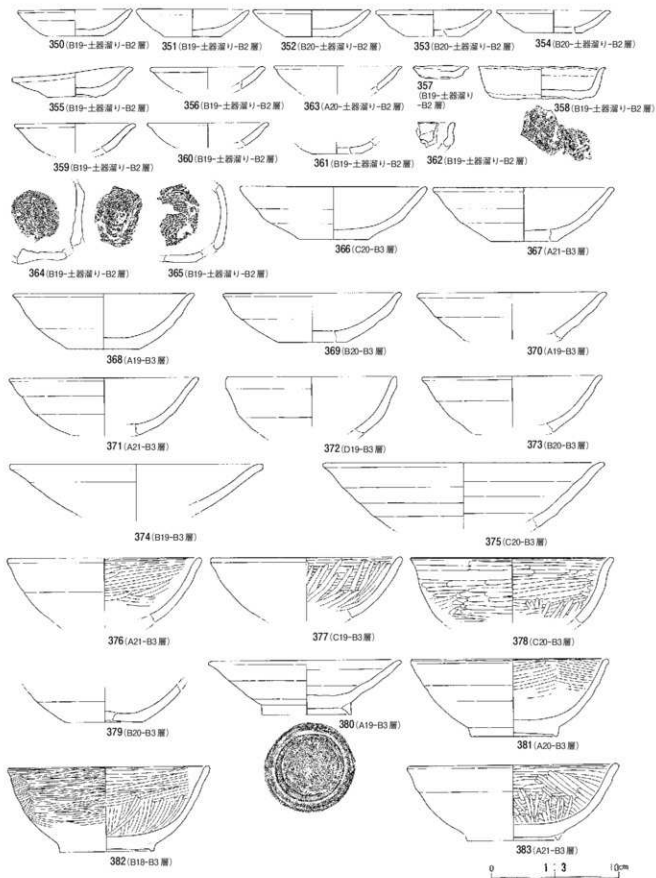
第19図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (9)



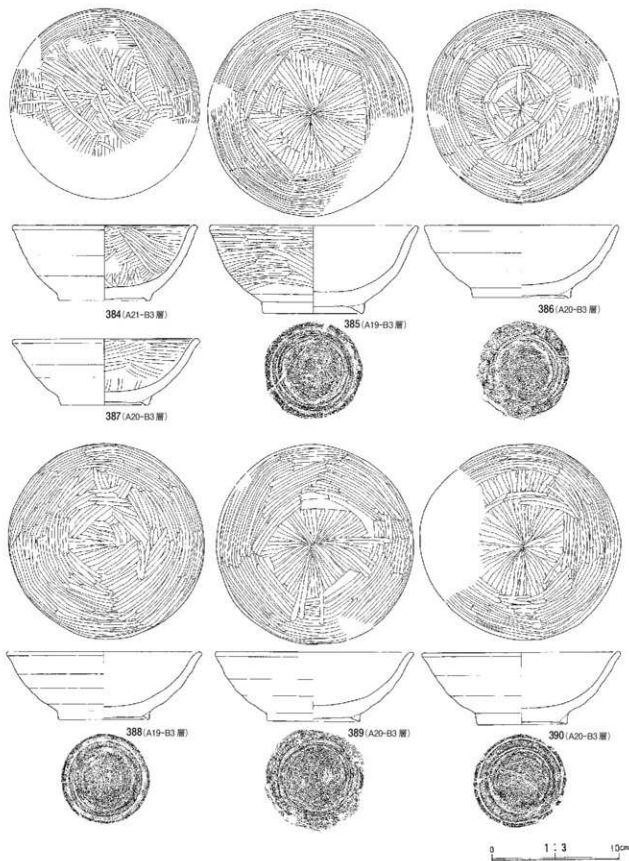
第20図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (10)



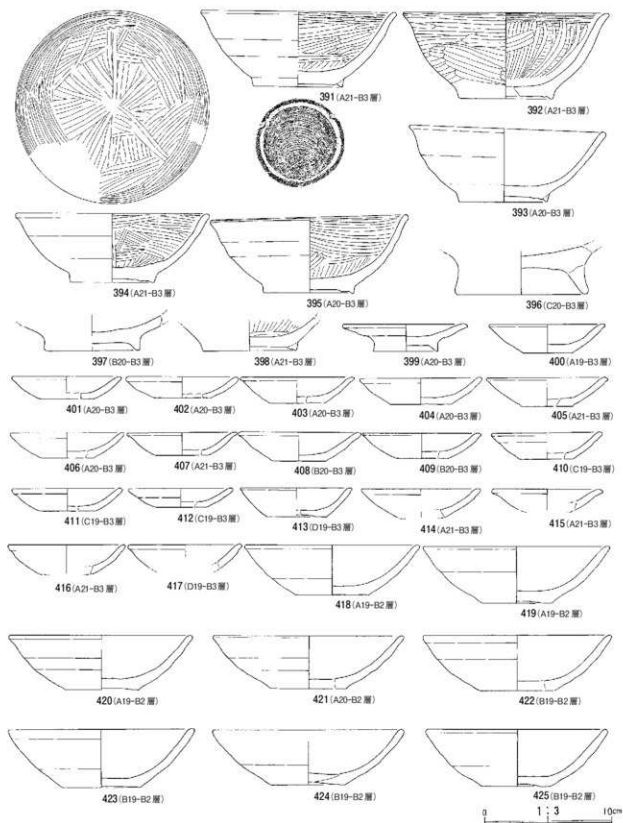
第 21 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (11)



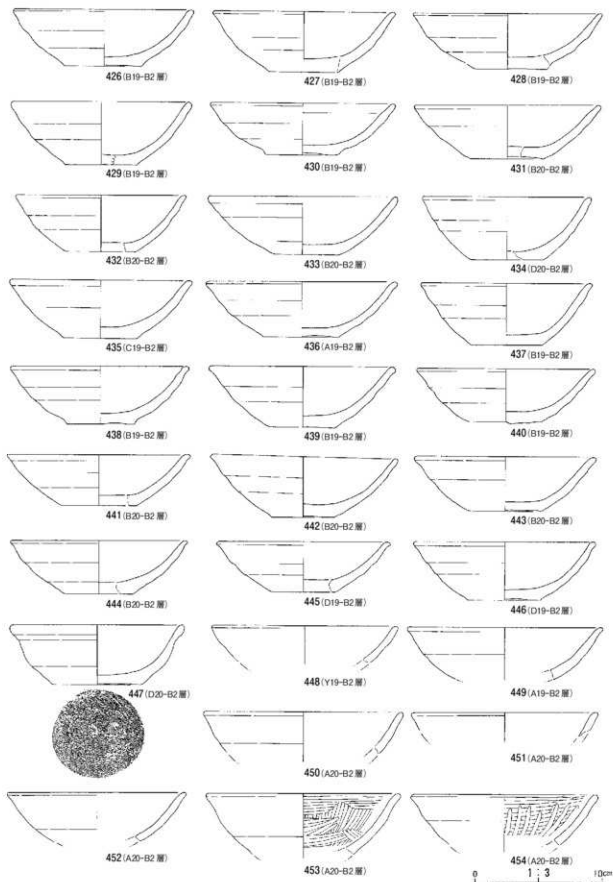
第 22 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (12)



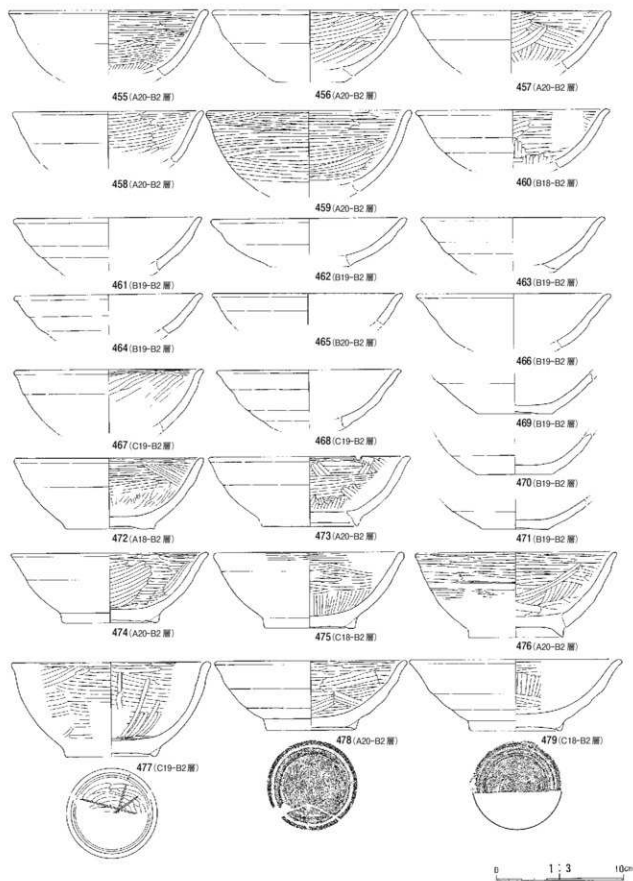
第 23 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (13)



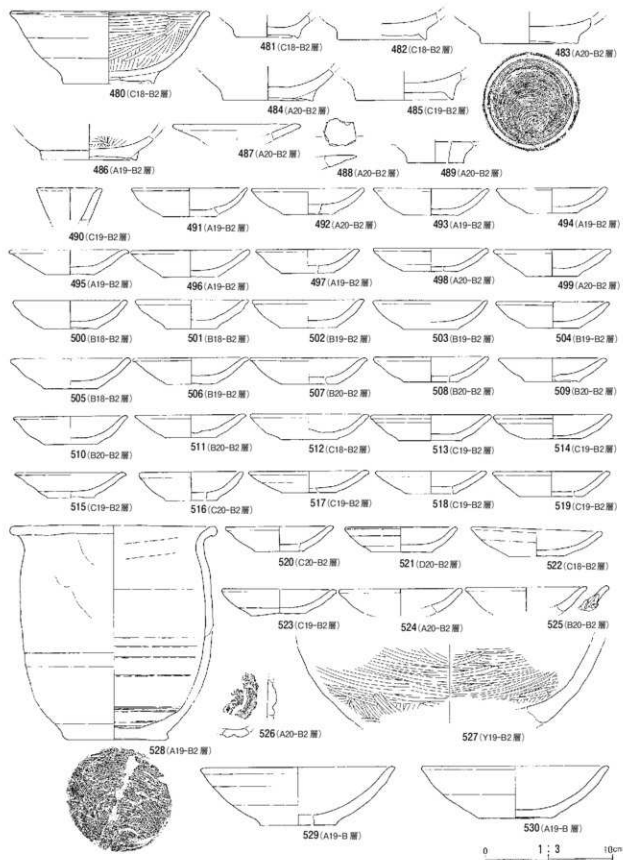
第 24 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (14)



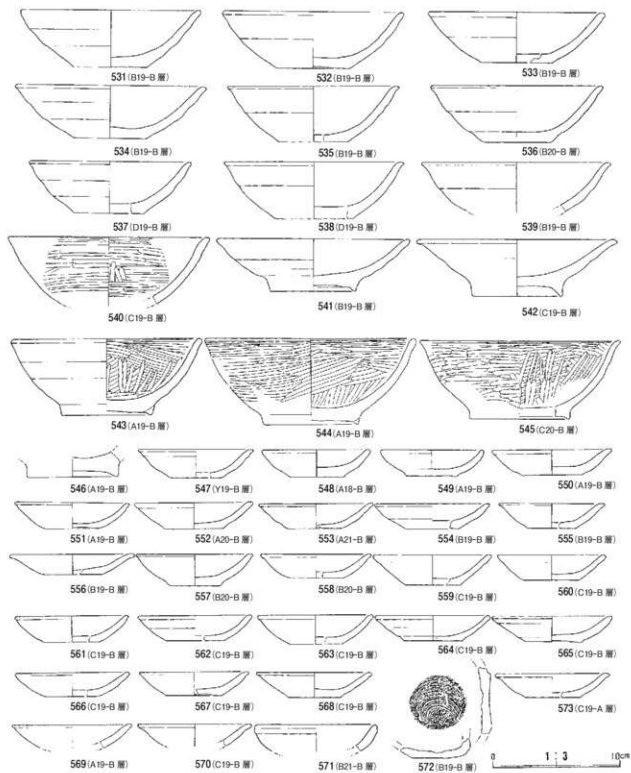
第 25 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (15)



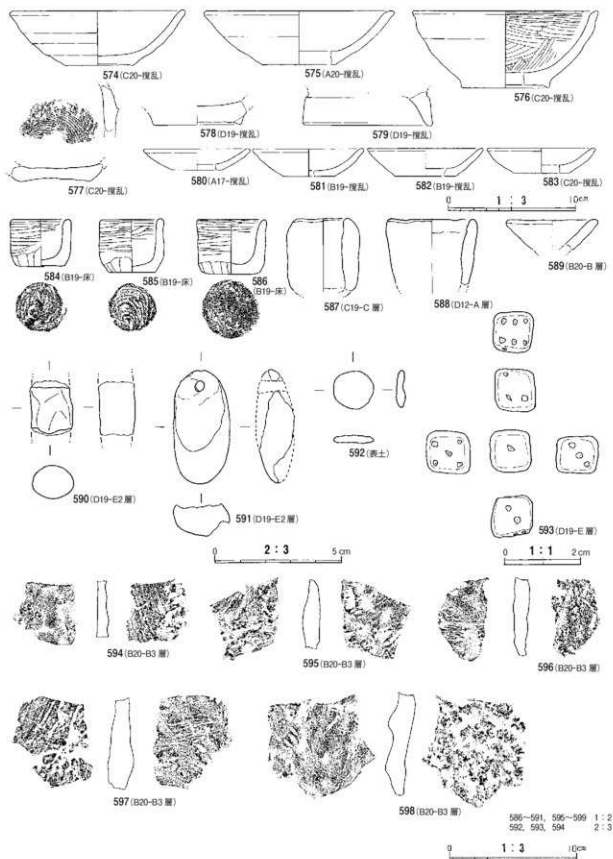
第 26 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (16)



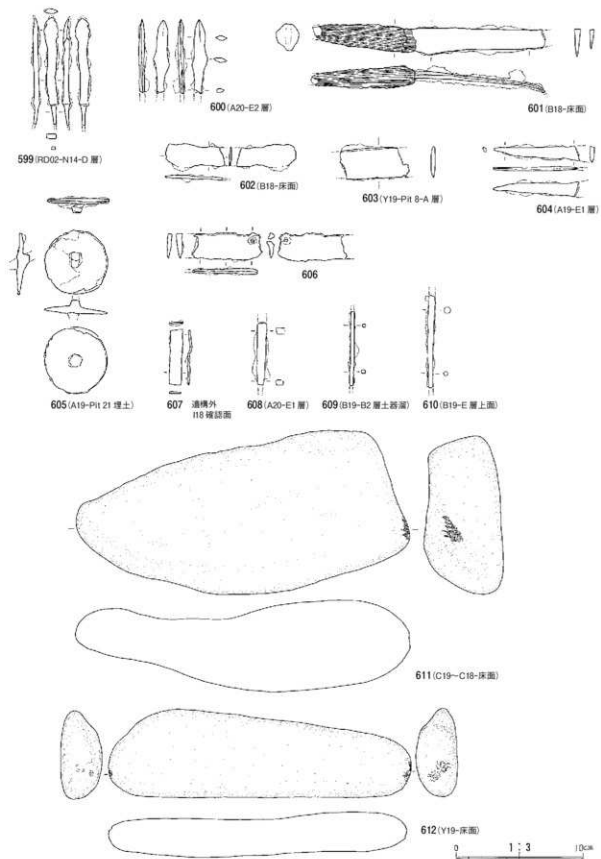
第 27 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (17)



第 28 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (18)



第 29 図 RE01 竪穴建物跡出土土器 (19)



第 30 図 RE01 豎穴建物跡出土鉄製品, 石器

RD18 土坑 (第10図、第46図)

表土直下のⅢa層上面に確認され、RE01 堅穴建物跡によって切られる土坑である。確認部分で南北5.18 m、東西2.3 mの不正形なプランで、88 cmの深さを持つ。埋土は次のとおりである。

- A層 黒褐色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土に10YR4/4シルト質植土が2%混入し、粉状、しまり具合と硬さは中程度)
- B層 黒褐色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土に10YR4/4シルト質植土が40%混入し、粒ないし塊状、密で硬い)
- C1層 黒褐色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土に10YR4/4シルト質植土が1%混入し、粉状、密で硬い)
- C2層 黒褐色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土に10YR5/4シルト質植土が2%混入し、粉ないし粒状、密で硬い)
- D1層 暗褐色土主体 (10YR4/3シルト質植土に10YR2/2シルト質植壤土が20%混入し、塊状、密で硬い)
- D2層 黒褐色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土に10YR5/3シルト質植土が40%混入し、塊状、密で硬い)

このうち底面から第46図5と6の小皿、C1層から7の小皿が出土している。

RD19 土坑 (第6図、7図)

Ⅲa層上面に確認され、RE01 堅穴建物跡の張り出し部に遺構上部を削平されている。RE01 堅穴建物跡の張り出し先端部は、本土坑の壁の形状と一致している。西半分以上を近代以後に攪乱されているが、確認部分では径1.3 m、深さ52 cmの円形と推定される。埋土の層相は次の通りである。

- A1層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土に7.5YR3/1シルト質植壤土20%、5YR4/3焼土10%混合し粒状ないし塊状、しまりはやや密でやや硬い)
- A2層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土に10YR4/4シルト質植土15%混合し粒状ないし塊状、しまりと硬さは中程度である)
- A3層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土に10YR4/4シルト質植土10%混合し粒状ないし塊状、しまりと硬さは中程度である)
- A4層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土に10YR4/4シルト質植土25%混合し粒状ないし塊状、しまりと硬さは中程度である)

以上の層相は、RE01 堅穴建物跡のE層の粘土以外の土と近似している。埋土中から遺物は出土していない。

RD02 土器焼成土坑 (第30図～第35図)

調査区中央部のⅢa層上面に確認された土坑で、試掘調査段階からこの地点に遺物が集中していたところである。土坑のプランは円形で南北2.04 m、東西2.02 m、深さは32 cmである。壁はゆるやかに皿状に掘りこまれている。埋土は上からA1層～A4層、B層、C1、C2層、D1、D2層に分層される。層相は次の通りである。

- A1層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本とし、7.5YR3/2シルト質植壤土5%、10YRシルト質植壤土3%混入し粉ないし粒状、層のしまりと硬さは中程度)
- A2層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本とし、10YR6/2灰40%混入し、粉ないし塊状、層のしまりと硬さは中程度)
- A3層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本とし、10YR7/2灰40%、5YR6/3焼土5%混入し、粉ないし塊状、層のしまりは中～密、硬さは中～硬程度)
- A4層 黒色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土を基本とし、5YR6/2焼土10%、10YR6/2灰20%混入、粉ないし塊状で、しまりと硬さは中程度、炭化物を多く含んでいる)

- B層** 黒褐色土主体 (10YR3/2シルト質植壤土を基本とし、5YR6/3焼土10%、7.5YR灰20%混入し、粉ないし粒状、しまりは中～密、硬さは中～硬)
- C1層** 鈍い赤褐色の灰主体 (5YR4/3灰を基本とし、5YR4/4焼土5%混入、粉～粒状、しまりと硬さは中程度)
- C2層** 灰褐色の灰主体 (5YR5/2灰を基本とし、5YR4/4焼土15%混入、粉ないし粒状、しまりと硬さは中程度)
- D1層** 黒色土主体 (7.5YR1.7/1シルト質植壤土を基本とし、10YR2/2シルト質植壤土20%、5YR4/4焼土10%混入、粉～粒状、しまりは中～密、硬さは中～硬)
- D2層** 黒褐色土主体 (7.5YR2/1シルト質植壤土を基本とし、5YR4/4焼土5%混入し粉状、しまりは中～密、硬さは中～硬、炭化物を多く含んでいる)

このうちC1層～C2層は灰層であり、上面は比較的平坦である。D2層下の底面には径22cmの不整形な薄い焼土があり、周囲に細かい炭化物の粒が散らばっている。

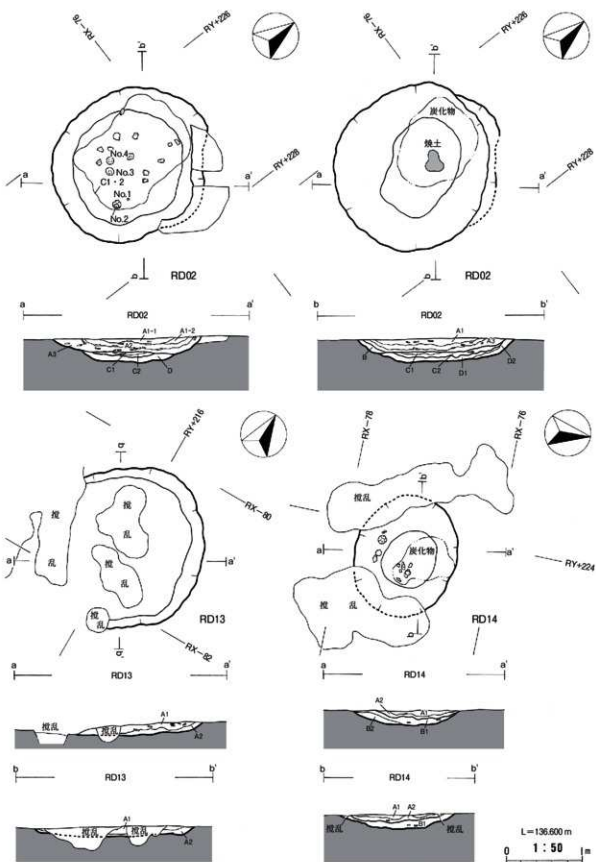
出土遺物には多くの土師器環、小皿、高台付環、甕破片と鉄鏝1点がある。第32図1～21はD層から出土した土師器である。1～5はロクロ環、6と7は高台付環の底部、8～21は小皿である。22～87はC層及びC層上面から出土した土師器である。このうち22～34はロクロ環で高台付環の可能性もある。26と30は内外ヘラミガキ、黒色処理された環である。33～35はロクロ環、36は高台付環の底部である。37～84は小皿である。このうち43は完形でC層中に正位で出土した(No.4)。第33図85と86はA3層下部(C層上面)に正位で重ねられているもの(No.1, 2)。87はA3層下部(C層上面)に伏せた状態で出土した(No.3)。第33図88～第35図212はA層から、213は検出面から出土した土師器である。88～125は土師器環で、94は内面ヘラミガキと黒色処理の環、105、108は内外ヘラミガキと黒色処理の土師器環である。126～134は高台付環で126は内外ヘラミガキの黒色処理、127、128は内面ヘラミガキと黒色処理の高台付環である。135～207は小皿である。208と210は手提ねの小形甕で同一個体の可能性がある。209は土師器甕の口縁部、211は土師器甕の底部、212は粘土塊、213はロクロ環である。第30図599は鉄鏝であるが先端部が欠損し、身部分が蛇行しているのが特徴である。

RD13土坑 (第31図、第36図)

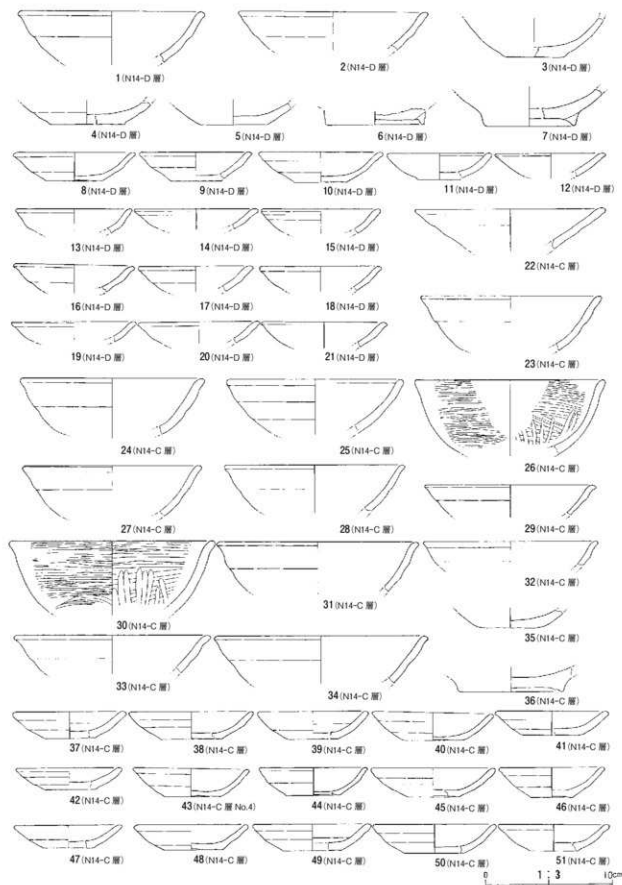
調査区の西部でRED1堅穴建物跡の東方に存在する土坑で、Ⅲa層上面で確認された。RD16土坑の一部を切って構築されている。耕作による擾乱が壁面にまで及んでおり、西壁が失われているなど残存状況は良好ではない。径2.1m、深さ16cmの円形土坑で、壁は緩く立ち上がり底面は概ね平坦である。規模と形状から土器焼成土坑の可能性もあるが、焼土や灰の堆積は認められなかった。埋土はA1層とA2層に分かれる。

- A1層** 黒褐色土主体 (7.5YR3/1シルト質植壤土を基本とし、5YR5/8焼土1%、10YR3/4シルト質植土7%混入、粉～粒状、しまり中～密、と硬さは中～硬、炭化物を含む)
- A2層** 黒褐色土主体 (10YR3/2シルト質植壤土を基本とし、10YR4/3シルト質植土7%混入、粉～粒状、しまり中～密、と硬さは中～硬)

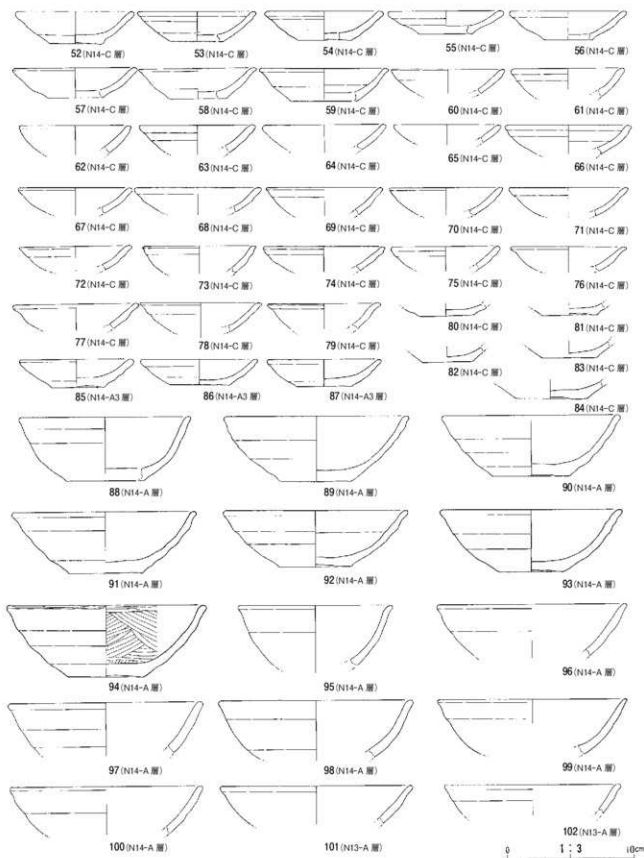
第36図1～7はA層中及び土坑に重なる擾乱から出土した土器である。1～5はA層出土の土器で1はロクロ環、2～5は高台付環で、2と3は内外ヘラミガキで黒色処理されたものである。3の底部高台内には鉋による刻割が認められる。6は擾乱から出土した小皿、7は土坑内擾乱出土の甕口縁部でロクロは使用されていない。



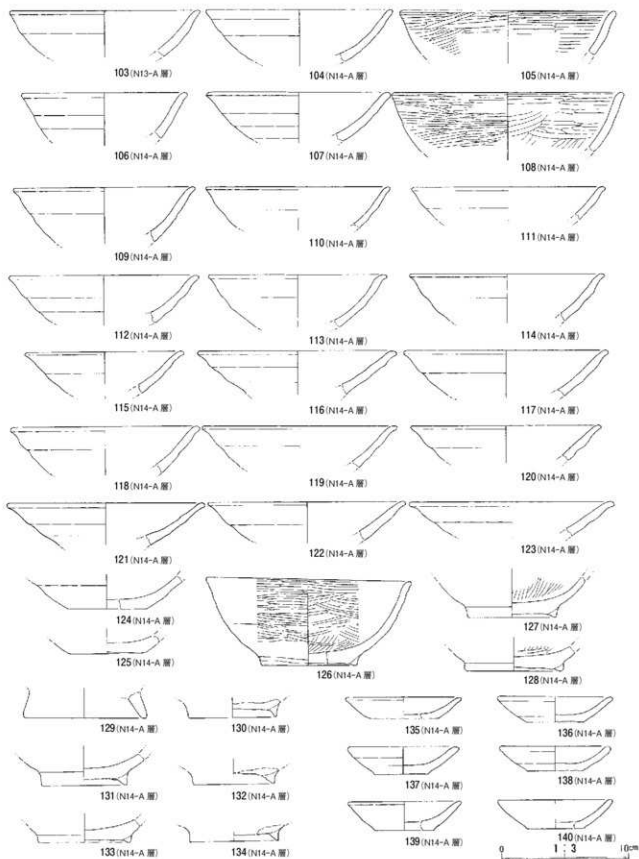
第 31 图 RD02 土器烧成土坑, RD13 土坑, RD14 土器烧成土坑



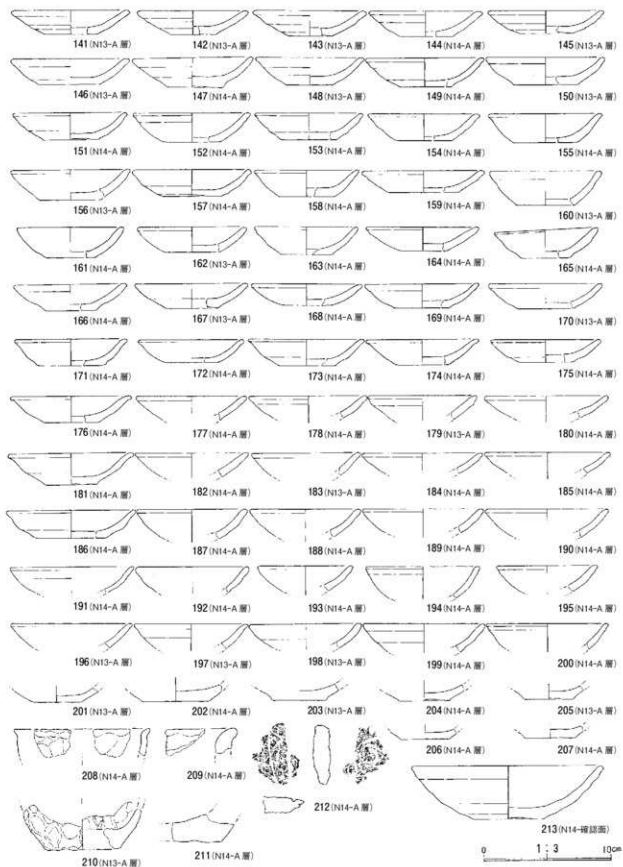
第 32 図 RD02 土器焼成土坑出土土器 (1)



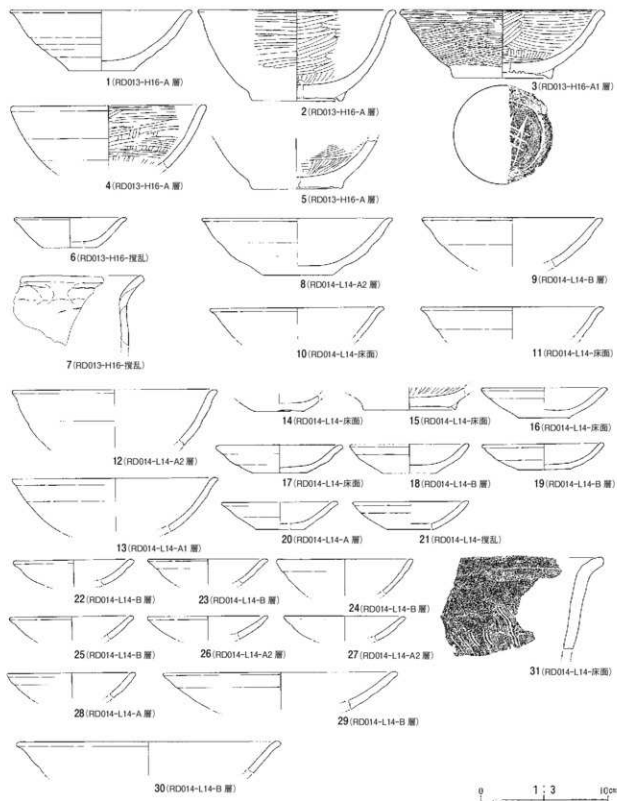
第 33 図 RD02 土器焼成土坑出土土器 (2)



第 34 図 RD02 土器焼成土坑出土土器 (3)



第 35 図 RD02 土器焼成土坑出土土器 (4)



第 36 図 RD013 土器, RD014 土器焼成土坑出土土器

RD14 土器焼成土坑 (第31図, 第36図)

RD02 土器焼成土坑の西側にあり、Ⅲa層上面で確認された。攪乱が著しいが、東西1.4m、南北1.4m以上の楕円形で、深さは20cmである。埋土はA1層、A2層、B1層、B2層に分かれている。層相は以下の通り。

- A1層 黒色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土を基本とし、10YR3/2シルト質植壤土2%、5YR4/4焼土5%混入、粉～粒状をなし、土層のしまりは中～密、硬さは中～硬)
- A2層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本に、10YR3/4シルト質植土10%、5YR5/4焼土25%、10YR6/1灰15%混入し、粉～塊状をなす、しまりは中～密、硬さは中～硬)
- B1層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本とし、10YR6/1灰2%、7.5YR4/4シルト質植土5%混入、粉～粒状をなす、しまりは中～密、硬さは中～硬で、多量の炭化物を含む)
- B2層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本とし、7.5YR4/4シルト質植土7%混入、粉～粒状をなす、しまりは中～密、硬さは中～硬)

第36図8～31は埋土中から底面より出土した土器である。このうち10、11、14、15、16、31は底面から、9、18、19、22～25、30はB層、8、12、27はA2層から、13、20、28はA1またはA層出土、21は土坑内攪乱からの出土である。8～14はロクロ坏、15は内面ヘラミガキと黒色処理の高台付坏、16～28は小皿、29、30は大ぶりのロクロ坏、31は外面に刷毛目のあるロクロ坏を使用していない甕の口縁部である。

RD11 土坑, RD12 土坑 (第37図, 第38図)

RD02 土器焼成遺構の西側に重複して確認された土坑で、いずれもⅢa層上面で確認されている。重複関係はRD12土坑がRD11土坑に切られ、RD11土坑をRD02土器焼成土坑が切って構築されている。

RD11土坑は径96cmの円形で深さは20cm、浅いレンズ状の断面形をなす。埋土は黒色土主体 (10YR2/1) のシルト質植壤土で褐色シルト質植壤土がA1層では2%、A2層では15%混合している。自然堆積層である。埋土中から土師器坏破片が少量出土している。

RD12土坑は長軸4.72m、短軸3.23mで深さ50cm、壁面は比較的整っているが底面には凹凸がある。埋土は埋め戻された様相である。各層相は次のとおり。

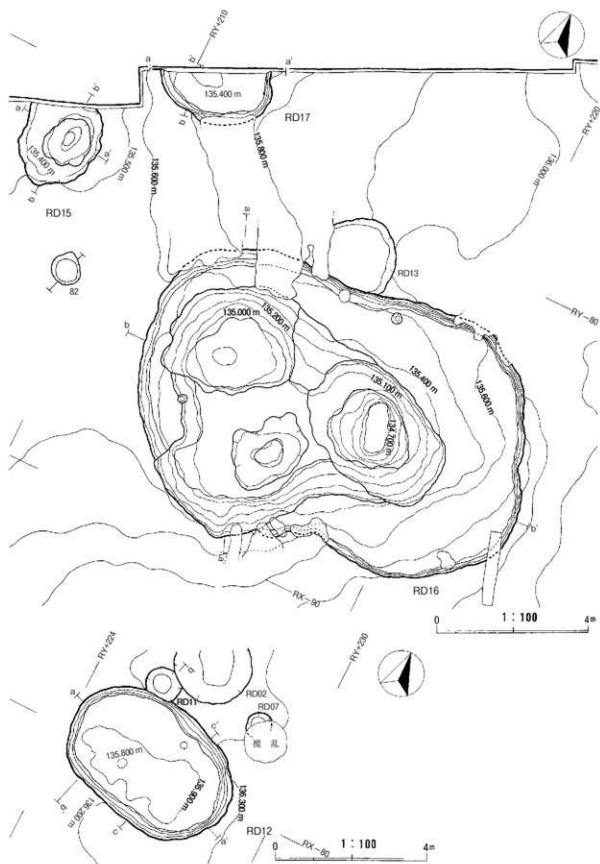
- A1層 黒色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土を基本とし、10YR3/2シルト質植壤土が5%混入し粉状、締りと硬さは中程度)
- A2層 黒色土主体 (10YR2/1シルト質植壤土を基本とし、10YR4/3シルト質植土が7%混入し粉状、締りと硬さは中程度である)
- B1層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本とし、10YR4/4シルト質植土40%、10YR3/2シルト質植土10%混入し塊状、締りは中～密、硬さは中～硬)
- B2層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本とし、10YR3/2シルト質植土20%混入し塊状、締りは中～密、硬さは中～硬)

埋土中から土師器坏・小皿・高台付坏の破片が出土している。

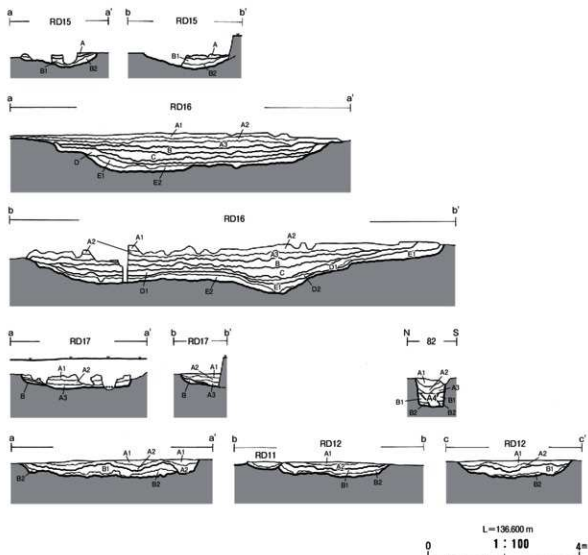
RD15 土坑 (第37図, 38図)

調査区北西部のⅢa層上面に確認された土坑で、径2m～2.3m、深さ38cmあり、凹凸の著しい不整形プランのである。埋土は次の通りである。

- A層 黒褐色土主体 (10YR2/2シルト質植壤土を基本とし、10YR4/4シルト質植土が20%混入し粉～粒状をなす、



第 37 图 RD11, 12, 15, 16, 17 土坑



第38図 RD11, 12, 15, 16, 17 土坑土層断面図

締りは密で硬い)

B1層 黒色土主体 (10YR2/1 シルト質埴壌土を基本とし、10YR3/2 シルト質埴壌土10% 混入、粉状、締りは密で硬い)

B2層 黒色土主体 (10YR2/1 シルト質色埴土を基本、10YR4/3 シルト質埴土7% 混入し粉状、締りは見乙で硬い) 埋土中から土師器小破片が少量出土している。

RD16 土坑 (第37図、38図)

RD13 土坑に一部重複する大型の不整形土坑で、Ⅲa層上面で確認された。長軸11m、短軸6.6m～7.5mあり、Ⅲa層からⅣ層にかけて掘り込まれ、底部には大まかに3つの深みがあり起伏がある。深さは0.8m～1.2mである。埋土はA層からE層に分かれているが、ほぼ全て自然堆積で埋没している。各層相は次のとおりである。

A1層 黒色土主体 (7.5YR1/7 シルト質埴壌土を基本とし、7.5YR5/6～10YR2/3 シルト質埴壌土が1%～7% 混入し、粉状、締りは中～密、硬さは中～硬)

- A2層 黒色土主体 (7.5YR1.7/1 シルト質植壤土を基本とし、7.5YR5/6～10YR2/3 シルト質植壤土が3%～7% 混入し、粉状、締りは中～密、硬さは中～硬)
- A3層 黒色土主体 (7.5YR1.7/1 シルト質植壤土を基本とし、10YR3/4～4/4 シルト質植土が7%～10% 混入し、粉～粒状、締りは中～密、硬さは中～硬)
- B層 黒色土ないし黒褐色土主体 (10YR1.7/1～2/シルト質植壤土を基本とし、7.5YR2/3～5/6 シルト質植土が10%～30% 混入、粉～粒状、締りは密で硬い)
- C層 黒色土主体 (7.5YR1.7/1～10YR2/1 シルト質植壤土を基本とし、5YR5/6 焼土5%、7.5YR2/2 シルト質植土7%、10YR6/6 シルト質植土3% 混入し粉～粒状) 締りは中～密、硬さは中～硬)
- D1層 黒色土主体(7.5YR2/1 シルト質植壤土を基本とし、10YR4/3 シルト質植土10%、5YR5/6 焼土3%、7.5YR3/4 シルト質植土10% 混入し粉～粒状、締りは中～密、硬さは中～硬)
- D2層 暗褐色土主体 (10YR3/4 シルト質植土を基本とし、10YR4/3 シルト質植土20%、10YR3/3 シルト質植土3% 混入し、粉～粒状、密で硬い)
- E層 黒褐色土主体 (10YR2/1 シルト質植土を基本とし、10YR5/4 シルト質植土10%、7.5YR4/6 焼土2% 混入し粉～粒状、締りは中～密、硬さは中～硬)

出土遺物はC層から第46図1の高台付環、B層から4の鉢口縁部で内外ヘラミガキ黒色処理されているもの、A層から3の内外ヘラミガキ黒色処理の鉢の体部、第46図24の縄文時代の磨製石斧が出土している。このほか土師器の環、高台付環、小皿、鉢、甕の破片が出土している。

RD17 土坑 (第37図、38図)

調査区の北辺、RD13土坑北西側のⅢa層上面で確認された。北側が調査区外であるが径3m内外の円形または楕円形と推定され、深さは40cmである。埋土は次の通りである。

- A1層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質色壤土基本、10YR4/3 シルト質植土1% 混入、粉状、締りは中～密、中～硬)
- A2層 黒褐色土主体 (10YR2/2 シルト質色壤土基本、10YR4/3 シルト質植土5% 混入、粉状、締りは中～密、中～硬)
- A3層 黒色土主体 (10YR2/1 シルト質色壤土基本、10YR4/3 シルト質植土7% 混入、粉状、締りは中～密、中～硬)
- B層 黒色土主体 (10YR2/1 シルト質色壤土基本、10YR3/3 シルト質植土10%、10YR4/4 シルト質植土5% 混入、粉状、締りは中～密、中～硬)

埋土中から土師器環や小皿の小破片が少量出土している。

掘立柱建物跡、柱列跡、柱穴群 (第39図～第42図)

調査区東側を中心に、4棟の掘立柱建物跡や2条の掘立柱列跡、82口の柱穴群がⅢa層上面より確認された。柱穴の内P82は大形の柱穴でRD16土坑の西に単独で存在する。柱穴の柱頭跡(A層)は円形で、黒色土または黒褐色土を主体とし、掘形の埋土(B層またはC層)は黒褐色土主体に褐色または暗褐色土が粒状や塊状で混入している。掘立柱建物跡や柱列跡、それ以外の柱穴の中からは土師器環、小皿などの小破片が出土しており、柱穴の多くが平安時代後期ごろと考えられる。またこのほかにもRG01溝を切る柱穴3口が存在するが、これは埋土や重複関係から近代以後の新しい柱穴と判断される。

RB01掘立柱建物跡は梁行2間×桁行3間の建物で棟方向はN49°Wを示す。RB03掘立柱建物跡と重複するが柱穴の

重複はないため新旧関係は不明である。東側柱筋は総長6.29 m、西側柱筋は総長5.72 m、北妻の梁行総長は3.32 mで、南妻梁行は直角とはならず、歪んでいる。

RB02 掘立柱建物跡は梁行2間、桁行2間以上の建物で棟方向はN28°Wを示す。南側は調査区外へと伸びている。北妻の梁行の総長は3.94 mである。

RB03 掘立柱建物跡は梁行、桁行とも2間の建物であるが、桁行の柱間が長く、棟方向はN55°Eを示す。梁行の総長は4.19 m、桁行の総長は7.04 mである。P2とP3の間にP25があり、P5とP7の間にRB01 掘立柱建物のP8があり、P8は重複の可能性もあることから、桁行が4間、梁行2間の建物の可能性もある。

RB04 掘立柱建物跡は梁行1間×桁行3間の掘立柱建物で、梁行の総長4.3 m、桁行の総長は北側で7.4 m、南側柱筋で7.16 mである。主軸はN56°Eを示す。桁行の柱のうち東端から2つ目の柱穴は攪乱で失われている。

RC01 掘立柱列跡はN58.5°Eを示し、総長4.48 mで2間。RC02 掘立柱列跡はN46.5°Eを示し、総長9.87 mで3間の柱間である。

縄文時代の土坑（第43図、48図）

RD08、09、10は、遺構の形態や埋土から見て縄文時代の土坑である。

RD08 陥し穴状土坑は長さ3.77 m、上幅0.76 m、底幅0.15 m、深さ1.2 mの大きさで、埋土はA層が黒褐色土主体、B層は黒褐色土と暗褐色土、褐色土混合土である。

RD10 陥し穴状土坑はRG01溝に上部を切られている。長さ3.52 m、上幅0.6 m～0.85 m、下幅0.12 m、深さ1.04 mである。埋土A層は黒色土ないしは黒褐色土主体。B層は黒褐色土と褐色土、暗褐色土の混合土である。

RD09 土坑は径1.2 m内外の不整形形で深さは33 cm、埋土は暗褐色土または黒褐色土主体で、褐色土粒が混入する。

中近世以後の土坑と溝（第44図、45図）

RD01 土坑は1.94 m×2.45 m、深さ20 cm～28 cmの土坑で、埋土はA層が黒褐色土に褐色土が混入、B層が黒褐色土と褐色土の混合土である。埋土から近世～近代の土坑である。

RD03 土坑は幅1.65 m、長さ2.2 m以上、深さ30 cmの浅い土坑で、埋土は黒褐色土主体で褐色土粒が混入している。近世以後の土坑である。

RD04 土坑は幅1.1 m、長さ1.58 m、深さ24 cmの楕円形の土坑で、埋土は黒褐色土主体である。年代は近世以後の土坑である。

RD05 土坑は径0.98 m、深さ12 cmの円形土坑で、埋土は黒褐色土主体である。埋土から近世以後の土坑である。

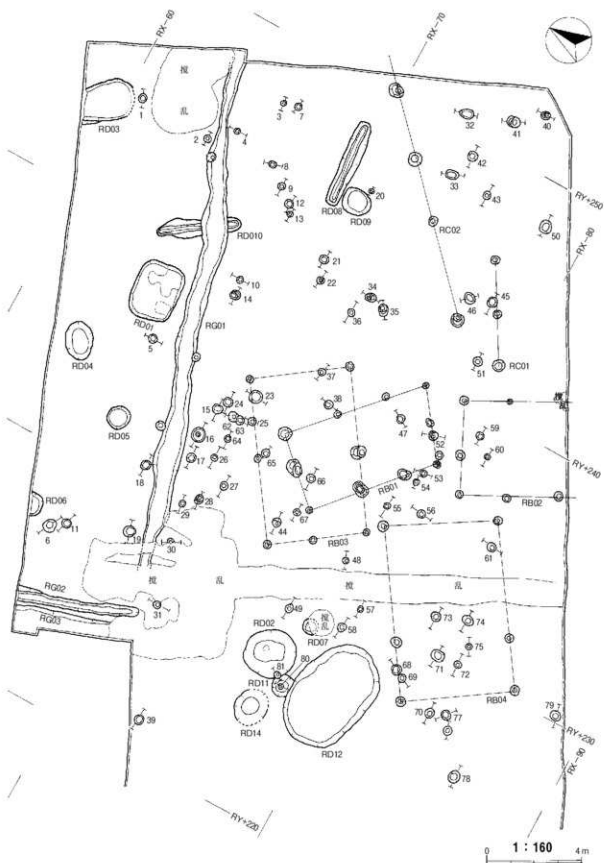
RD06 土坑は径1 m、深さ18 cmの円形土坑で、埋土は黒褐色土主体である。埋土から近世以後の土坑である。

RD07 土坑は径67 cm、深さ21 cmの土坑で、埋土は黒褐色土主体で、褐色土粒が混入している。中世以後の土坑の可能性が高い。

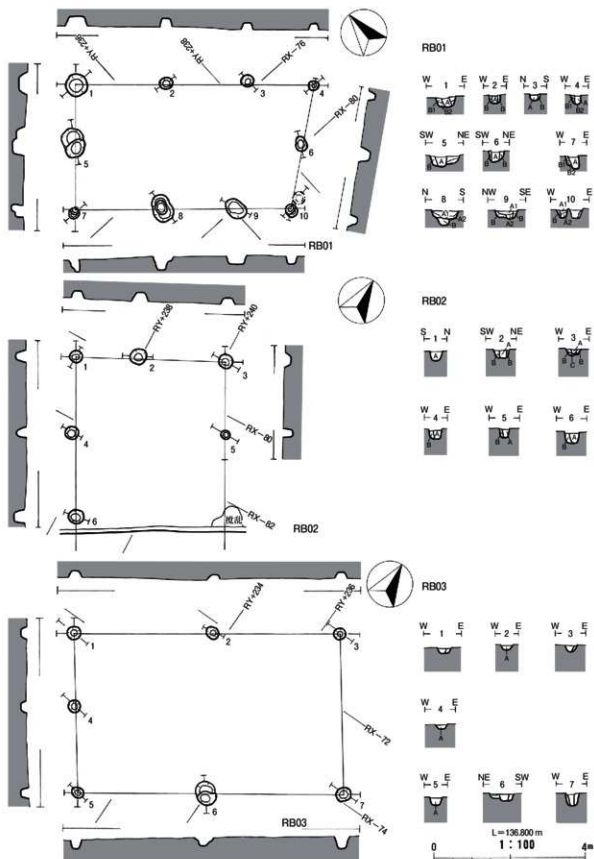
RG01～03溝は表土に近い黒褐色土ないし暗褐色土主体の埋土であり、RG03からは図示していないが鉄製鑪や銅製の煙管吸い口、蹄鉄が出土していることから溝内の堆積は近代以後である。

遺物包含層及び遺構外出土遺物（第46図）

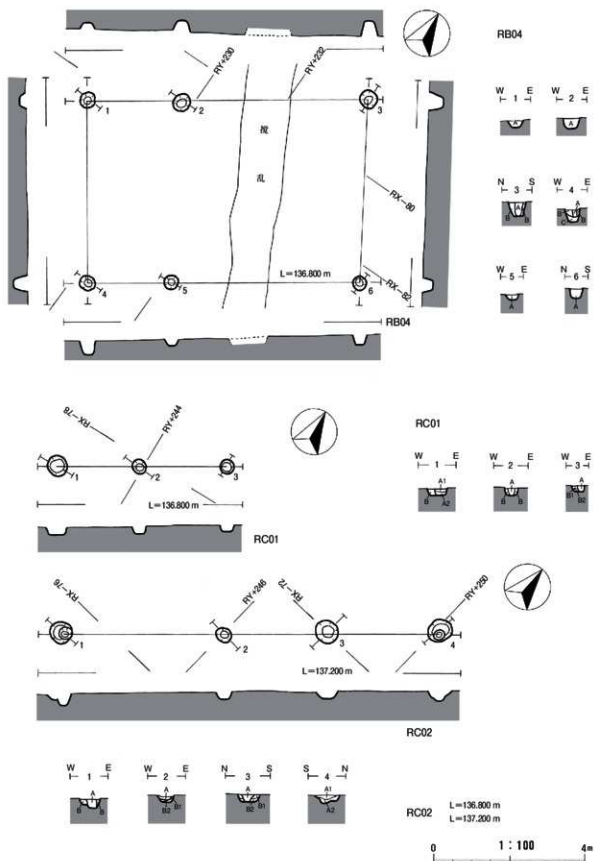
第46図8～17は遺構外の検出面または攪乱から出土した土師器で8～16は小皿、17は小型の坏底部である。18～23は第3次調査区東よりの表土から出土した縄文土器で大木8a式の深鉢形土器の破片である。



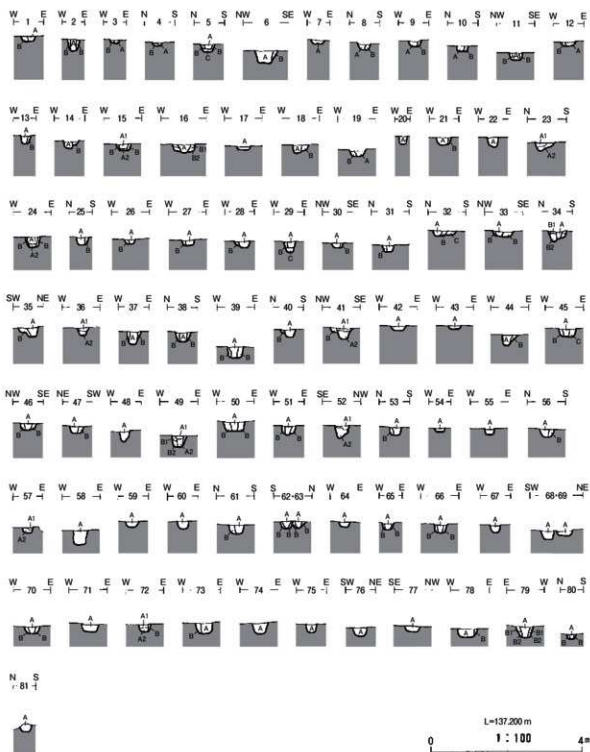
第 39 図 掘立柱建物跡，掘立柱列跡，柱穴群



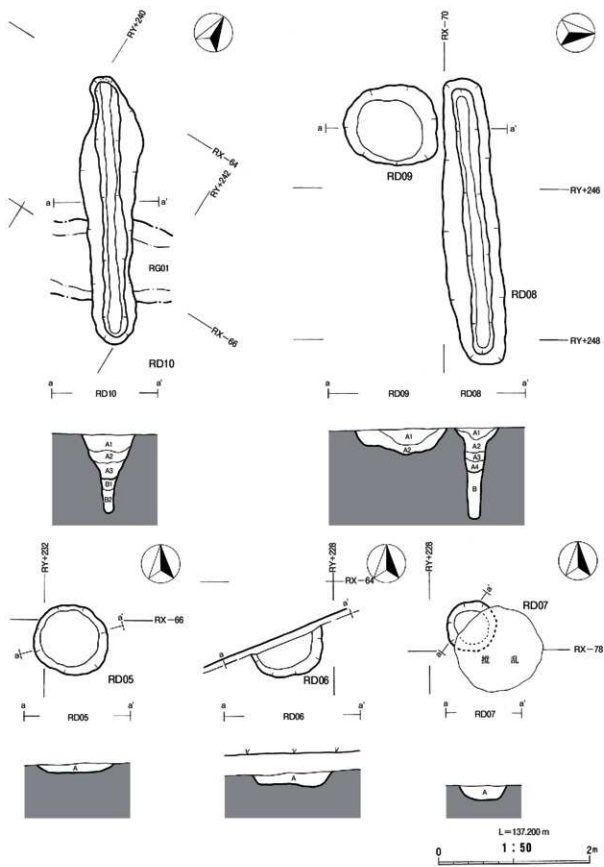
第 40 図 RB01~RB03 掘立柱建物跡



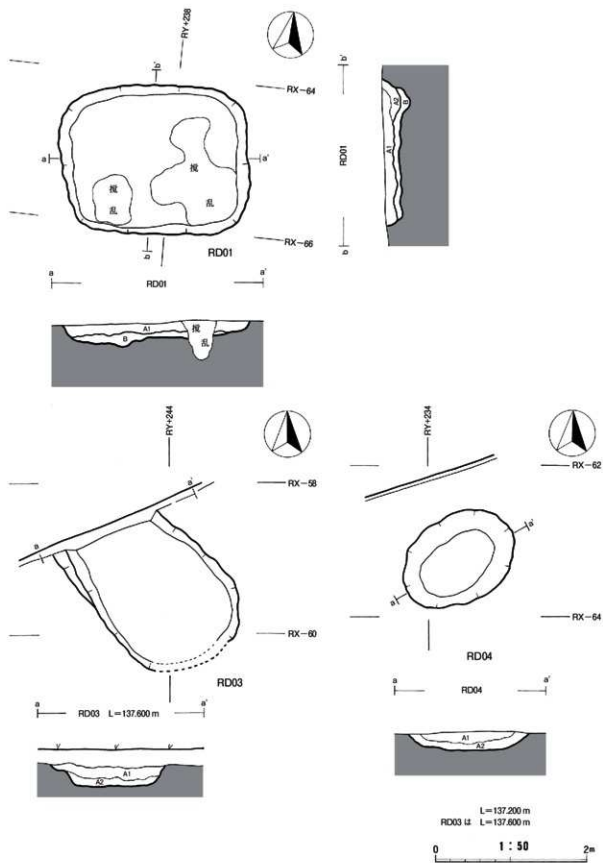
第 41 图 RB04 掘立柱建物跡, RC01, 02 掘立柱列跡



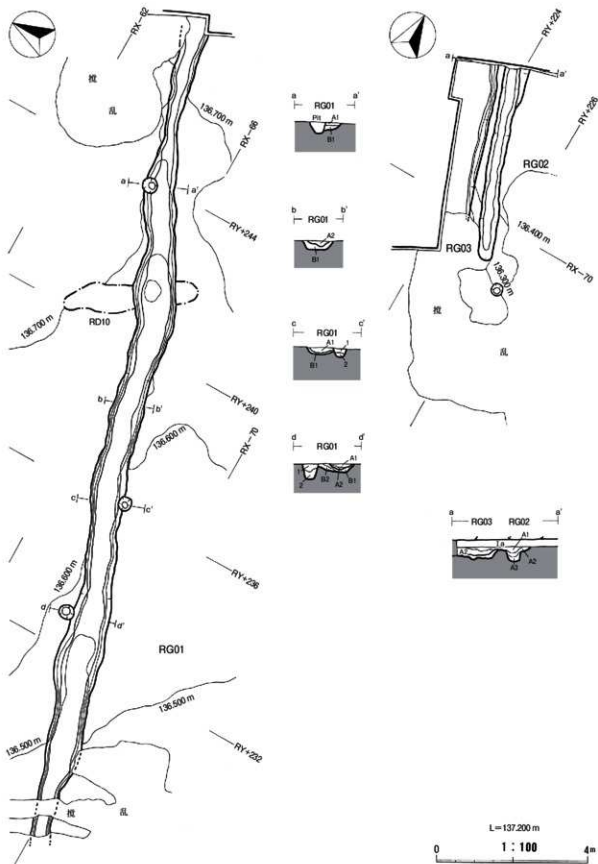
第 42 图 柱穴群土层断面图



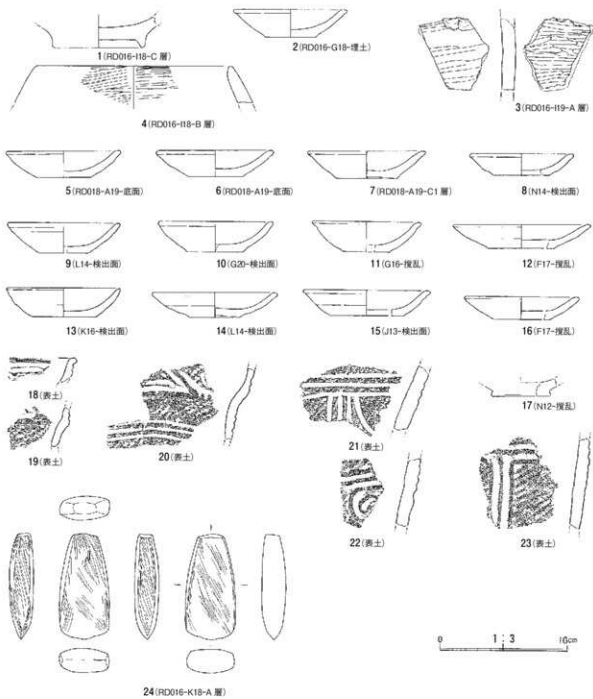
第 43 图 土坑 (1)



第44图 土坑(2)



第 45 図 RG01~03 溝



第 46 図 RD16, 18 土坑及び遺構外出土遺物

IV 総 括

1 遺構についての考察

竪穴建物跡と掘立柱建物

RE01 竪穴建物跡は西壁部分が未確認であるが、推定される規模は東西約 8.27 m、南北 5.6 m の隅丸長方形のプランで、中央に地床跡を持ち、6 本の主柱穴で屋根を支えている。柱穴のうち東妻の 2 本は東壁に接しており、柱と竪穴の壁との位置関係から屋根は東側が切妻であり、西側は寄棟であったと推定できる。東壁や南壁沿いに小形の柱穴が配されているが、浅い穴であることから壁の崩落を防止する程度のものであろう。したがって屋根の軒下に腰壁は無く、軒は葺きおろしであったと考えられる。西側を寄棟としたのは、この地方の冬から早春にかけて吹き荒れる強い西風に対応したものであろうか。竪穴建物は 1 期の後一度貼床されて 2 期に変遷しているが、その際に南壁の西よりに出入口の張り出しが設けられている。この張り出しに上部を削平された RD19 の埋土は貼床の E 層に近似していることから、この土坑は 2 期の貼床に伴い埋め戻されたらしい。竪穴建物の主柱穴は南西隅の P4 は確認時の状況から 2 期にも継続していたらしく、主柱穴 6 本に明確な重複が無く、6 本の主柱はそのまま 2 期へと継続したと推定できる。中央の柱 1 は 2 期にも継続されて使用されているらしいが、柱 2～5 は貼床に覆われており継続しない。1 期の床面には切先の曲がった鉄製刀子のほか刀子や鉄鎌の残欠があり、B2 層からは鉄洋が出土している。さらに柱穴の柱頭跡には軸の折れた鉄製紡車が入っていた。このことから 1 期の竪穴内部では欠損した鉄製品など鉄素材として集め、製品を再生するような小鍛冶作業が行われていた可能性がある。柱 2～柱 5 は小鍛冶作業に関連する柱であるのかも知れない。2 期の竪穴建物には柱 1 の南側貼床の上から轆轤穴が掘り込まれている。貼床 E 層は灰白色の粘土が多く含まれており、均一の厚さではなく、竪穴中央部や東壁近くでは薄く、南壁近くでは厚くなり、2 層～3 層盛られている。このことから 1 期のある段階から竪穴の南壁近くに粘土や配合土が集積されており、E 層はその一部を使用して貼床されたものらしい。この際に轆轤の設置と南側張り出しが設けられたのである。張り出し部分が出入口であるとすれば、入り口を入れて右側に轆轤が設置されており、土器制作の工人は柱 1 の暖房と明かりを頼りに作業することができた。1 期の竪穴建物内部で小鍛冶作業が行われていたとすれば、1 期のある段階からは小鍛冶作業と粘土等の集積場所を兼ねていた可能性がある。屋内に集積すれば、粘土や配合土の乾燥を抜きやすからであろう。竪穴建物は 1 期の鍛冶工房から 2 期には土器制作工房へと機能が変化したことになる。その後 2 期の終焉にあたり、轆轤が撤去されてその跡には 20 個ほどの土器の坏が集められ、埋納されていた。土器器製作工房を閉じる儀礼行為であろう。建物上部を支えた主柱穴には抜き取り痕跡が無いことから見れば、柱は地上部分のみ切断して屋根を撤去したと考えられる。その後土器制作の工房は遺跡内のどこかへ移り、この竪穴建物跡の窪みは RD20 土器焼成土坑（窯）へと変換し、ここで大量の土器器を焼成したのである。焼成による焼土の形成は主に竪穴西壁付近に多く形成され、他の部分では疎らであった。残された製品や破片は全体から出土しているが、柱 1 に重なる土器溜りには径 2.5 m の範囲に隙間なく土器破片が集積されていた。柱 1 の上面には灰の堆積が残存し、土器溜りや RD20 土器焼成土坑の埋土中に炭化物の混入は認められたが、後述する RD02 焼成土坑のような灰の堆積は確認されなかった。伏焼きの灰が除去され、製品の土器を取り出した後に、製品化に失敗した土器を集積したのが、RD20 土器焼成土坑の土器溜りであったと考えたい。

竪穴建物や土器焼成土坑の東方には掘立柱建物が 4 棟確認されている。小形の柱穴で構成されており、それも廂や下屋は伴わない、側柱で構成された簡素な建物である。竪穴建物と棟方向の一致する建物や柱列は存在せず、両者の間には時

期差があるのかも知れないが、柱穴やその周囲からも土師器小皿や坏の破片が出土しており、土器焼成土坑などと関連する建物の可能性がある。

土器焼成土坑と土取り土坑

前述のRD20土器焼成土坑のほか、RD02、RD14は土器焼成土坑であり、近くのRD13もその可能性をもっている。径1.2mから2.1mの円形に掘くぼめて底は概ね平坦に造った浅い土坑で、内部には焼成した土器の残りや破片、炭化物、灰などの堆積や焼土の形成が見られる。RD02土器焼成土坑は埋土中位のC1層～C2層に厚い灰の堆積があり、その上に小皿が正位で重ねられたり伏せて置かれていた。RD14土器焼成土坑は小ぶりの遺構であるが、A2層は灰が多く混入し、底面には炭化物の坩がりと焼土とともに小皿が伏せられていた。RD02土器焼成土坑C1層からC2層の灰層は、焼成時製品の上に藁などの燃料をのせ、更に灰を被せた伏せ焼きであったことを示す。この明瞭に残された灰層上面に土師器小皿が4個体伏せられていたのは、焼成して製品を取り出した後に再び灰を被せて上面に遺したと考えられることから、焼成土坑を閉じる儀礼行為と推定できよう。RD13土坑には焼土や灰の堆積はなかったが、土坑の規模はRD02土器焼成土坑に近似しており、土師器の坏や高台付坏、小皿がまとまって出土している。焼土や灰、炭化物などは焼成後に除去されたものか、あるいは激しい攪乱によって失われた可能性が高い。

一方、RD12、RD15、RD16、RD17、RD18については地山のⅢ層からⅣ層まで掘り込んでいることや、穴の底面に凹凸のある形態で、掘削後RD12土坑は全て埋め戻され、RD15、RD16、RD17、RD18は放置された自然堆積のあり方からみて、地山の土を採取するための土坑と考えられる。RD16とRD18からはRE01竪穴建物跡のほかRD02、14、20と同質の土器が出土していることから、同じ時代に掘削された土坑である。掘削は良質な灰白色粘土には到達していないが、粘土と配合する土としてⅢ層からⅣ層を求めた可能性が高い。RD16の掘削方法はⅢ層より下のⅣ層を狙っていることは確実であり、黄灰色や灰黄色のⅣ層、あるいは黄褐色土のⅢ層から黄灰色土のⅣ層に移行する中間層の土を得るのが目的であったと考えられる。

2 遺物についての考察

出土遺物には平安時代の土器、鉄製品、石製品、土製品があり、他に縄文時代の土器と石器、近世以後の陶磁器、鉄製品、銅製品がある。最も多いのは平安時代11世紀に係る土器類で、調査区全体では遺物台帳登録番号で3457点出土している。このうち須恵器はRE01竪穴建物跡から須恵器大甕の体部破片3点のみであり、他は全て酸化炎焼成の土師器であった。遺構ごとの出土量はRE01竪穴建物跡(RD20土器焼成土坑)から1845点、RD02土器焼成土坑から315点、RD13土坑から43点、RD14土器焼成土坑から69点、RD16土坑から45点、RD17土坑から4点、RD18土坑から3点、遺物包含層(Ⅱ層)から6点、遺構検出面から表土、攪乱から1127点の土器類が出土している。平安時代の鉄製品はRE01竪穴建物跡から17点、RD02から1点が出土している。RE01から土製品は2点、石製品は3点、石器は2点出土している。また縄文時代遺物はRD08土坑、RG01溝の周辺から縄文時代中期の深鉢形土器破片9点、RD16土坑から磨製石斧が1点出土した。RG02溝からは18世紀以後の肥前集付皿の破片3点が出土している。

11世紀の土器様相

竪穴建物跡、土器焼成土坑、土坑から出土した土器のうち、そのほとんどは酸化炎焼成の土師器である。器種は坏、高台付坏、小皿、高台付皿、鉢、小形器台、甕がある。このうち甕は粘土の輪積みまたは巻き上げ丹技法で整形され、ロクロを用いずに作られている。坏や高台付坏、小皿、高台付皿、鉢、小形器台は、ほとんどは右回転のロクロ成形と糸切りで

作られ、手捏ねのものは小皿の一部に見られるのみである。

坏は、ロクロ水挽き回転糸切り無調整の坏も1点存在するが、ほとんどの坏はロクロ回転糸切り後外面無調整で、内面は水挽き痕が残らぬよう平滑に調整している。この工具についてははっきりしないが、布が弾力性のある皮革類を使用している可能性がある。村田晃一は「土器制作時のロクロ回転させた際に外面を指で押さえ、内面にコテ状工具をあてがひ、最後に口縁部を布か革などで仕上げた結果」(村田1995)としている。小皿も坏と同様の整形、調整方法である。

内面黒色処理または内外黒色処理の高台付坏の底部は台状の厚い底部をもち、体部から口縁部にかけて内湾する。黒色処理の箇所は丁寧にヘラミガキされている。これは坏の底部をコースター状の粘土板のせてロクロ成形し粘土板ごと糸切りで切り離した後、土器を逆さまにして底部から粘土板の外周に粘土紐を巻き付けて高台をわずかに突出させる。その後轆轤回轉により高台の外法を刷毛のようなもので調整し高台と底部粘土板との接合部を整えている。以上の工程により高台付坏の底部は厚底となるが、高台内法のロクロ回転刷毛調整によって高台と見込みの落差がなくなり、高台がほとんど目立たなくなる場合もある。

高台付坏のなかには、坏部が内湾する形状のと、坏部が直線的に外傾する器形がある。外傾する器形は坏部分の器高が低く、坏と皿の中間の形態である。底部はやや厚く高台部分は底部の周囲に貼り付けられるが、ヘラミガキ黒色処理の高台付坏の高台よりも高さがあり、下端部はシャープな形状である。またこれとは別かなり大ぶりの坏、または皿か盤、あるいは鉢のような器形に付された高台は、底部外周に粘土紐をまわしてより高く高台を作っている。その端部は厚く丸みを帯びており、高台外面に段をもつものも認められる。

小皿にはロクロの坏と同じ製作法で作られるものがほとんどであるが、一部の小皿には手捏ねのものや、ロクロ成形切り離し後に、わざわざ指頭で押しつけて器面に凹凸を生じさせたものが1点確認されている(第22図364)。ロクロ小皿の多くは体部が内湾きみに外傾している。口唇部が幾分外反するものや、口唇部下に縦線を入れて外反らしく見せるもの。内湾したままのもの、直斜状に外傾するものなどがある。

小形器台には柱状高台と輪高台がある。柱状高台は破片でのみ確認される(27図489)。輪高台は皿の底部外周に高い高台を付したもの(18図233~235及び24図399)で、高台の付しかたは坏部直斜状の高台付坏の高台に類似している。

甕は全て粘土紐の輪積みあるいは巻き上げ技法で作られ、底部外面に木葉痕のあるものも認められる。ロクロを用いずに整形し、体部外面をヘラケズリや刷毛目で調整。内面をナデで調整する。口縁部は短く外反し、体部から底部にかけてすばまった形状である。特異な例として、体部内外を指頭で凹凸にし、口縁部を指の爪をたてつつ捻り出した小形甕(第35図208、210)がある。

赤婁遺跡土器群の年代

岩手県内では安倍氏の拠点鳥海欄跡(金ヶ崎町:国指定史跡)出土土器の存在や、岩手町岩崎遺跡から出土した土器が当該時期の土器として認識され、注目されてきた。近年では滝沢市大釜の大釜館遺跡や八幡館山遺跡にも同様の土器群が確認され、盛岡市内の大新町遺跡や小屋塚遺跡、宿田遺跡、上堂頭遺跡、高松神社裏遺跡、西黒石野遺跡などの出土遺物にも近い時期の資料が確認されて、これらも10世紀末から11世紀までの年代が示されるようになった。一方鳥海欄跡では、地元金ヶ崎町教育委員会によって国史跡指定に向けて内容確認調査が進められ、これに併せて過去の発掘調査成果の再整理が行われ、2013年5月に発掘調査報告書が刊行されている(金ヶ崎町教育委員会2015)。浅利英克はこの報告書の考察で、鳥海欄出土土器をI群(8世紀以前)、II群(9世紀初め~10世紀後半)、III群(10世紀末~11世紀末)、IV群(11世紀末~12世紀後半)に分類し編年を試みた。この中でIII群とした土器群は鳥海欄が機能した時代のものであり、遺構の新旧関係からIII-1群とIII-2群に分類し、III-1にもIII-2にも細分不可能である資料をIII期とした。III-1群は小皿、坏、高台付坏、内黒高台付坏で構成されるが、坏が主体で小皿や高台付坏、内黒高台付坏は少なく、若干の須臾器

壺が伴う。土師器の器高が低く、底部が台状になるものが多い。土師器の高台付付は器高が低めで高台は円盤状か柱状または断面三角形の高台となる。小皿はまだ環よりも少なく、底部は台状とならず平坦で体部から口縁部はやや内湾する。年代は思城終末の10世紀末よりも新しく11世紀前半としている。同時期の資料として長者原廃寺跡 SX051 土坑第2層、国見山廃寺跡 SB001 礎石建物跡、跡呂井遺跡、河崎欄板定地道跡、植田前遺跡第2号溝状遺構、多賀城行政跡 SK078 土坑、大島井山遺跡 6SK428 土坑などが挙げられている。

Ⅲ-2群は土師器内黒高台付付がなくなり、土師器の環と小皿主体となる。土師器の環はⅢ-1群と比較して底部が台状となるものが少なくなりやや器高が高くなる。小皿の底部は台状を成すものと台状にはならないものが混在する。Ⅲ-2群はⅢ-1群に比べ、内黒土師器高台付付の出土量がごく僅かであり、Ⅱ群から継続する土師器の環、高台付付、内黒土師器高台付付の器種構成が見られなくなる一方、小皿が多くなり、土師器の小皿と環による大小の器種構成が明確化される時期と考えられるとし、この群の年代観は11世紀中頃としている。この時期の比較資料として、蛇塚組遺跡 SX1 竪穴遺構、大釜館遺跡 7号、9号溝跡、八幡山遺跡、沼崎遺跡、多賀城跡第82次 SK3027 土坑、同 SE1066 井戸跡、台抱館跡 SI01、大島井山遺跡 3S01、02、3SF102、同 4 SD103、同 7 SD30 などの資料が挙げられている。以上が島海欄跡の土器様相である。赤異遺跡出土土器は、島海欄跡Ⅲ-1群、Ⅲ-2群のうち、Ⅲ-2群に近い様相であるが、土師器のヘラミガキで内面黒色処理または内外黒色処理の高台付付については、島海欄跡ではⅢ-2群では激減している。これに対し当遺跡では内黒または内外黒色処理の高台付付は、RE01 竪穴建物跡や土器焼成土坑全ての遺構で一定量の出出が確認され、Ⅲ-2群と同時期とされる滝沢市大釜館遺跡でも当遺跡と酷似する内面黒色処理の高台付付が伴件している。岩手郡や北の糠部地方では、平安時代の後期の遺跡では壺類や内面または内外黒色処理の環や高台付付が多く出土する反面、ロクロ水挽きの環類が極度に少ないという特徴があり、岩手郡の地域色の現れた土器様相と考えられる。

赤異遺跡の周辺では、北西側の境橋遺跡、南方の稲荷町遺跡、南東の大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡、宿田遺跡、北東の上堂頭遺跡から、赤異遺跡と同時期か、やや先行する年代の土器が確認されている。このうち稲荷町遺跡では2016年4月11日、開発計画により盛岡市教育委員会が遺跡北西部の試掘調査を実施したところ、平安時代後期の竪穴建物跡3棟や柱状、溝などが確認され、竪穴建物跡の1棟からは赤異遺跡の内面黒色処理の土師器高台付付と同質の土師器破片が出土した。この遺跡は12世紀後半の居館と推定されてきた(室野1994)が、11世紀中頃の遺構遺物の存在が明らかになった。大新町遺跡と小屋塚遺跡では、これまでに竪穴建物跡や掘立柱建物など平安時代後期の遺構遺物が確認されている。大新町遺跡1982年度の発掘調査では RE701 竪穴から土師器のヘラミガキ黒色処理の高台付付、ロクロ環、ロクロ小形環、ロクロ小皿が出土。RD702 土坑からは内面ヘラミガキ黒色処理の環と高台付付、ロクロ小皿が出土している。RE701 竪穴では小形ロクロ環が伴い、やや高い高台の内面ヘラミガキ黒色処理の高台付付が多く出土しており、10世紀後半～11世紀前葉の土器に近い様相が窺える。RD702 土坑出土の土器群には小形のロクロ環はなく、小皿は口唇部が幾分外反する器形のもの3点、体部の中程から口縁部へ直斜状に立ち上がるものが1点出土している。また伴した土師器内面ヘラミガキ黒色処理の高台付付は、RE701 竪穴出土の土器に比べて体部下半の内湾する形状が緩やかで、口縁部も RE701 の高台付付の口縁部よりも幾分強く反り返る。また底部は厚く作られて粘土板貼り付けられている可能性が高く、ロクロから切り離した後に底部粘土板外周に低く高台を貼り付けたものである。RD702 土坑の土器群は、土師器のロクロ環は出土していないものの、土師器の内面黒色処理の土器や小皿においては、赤異遺跡の出土土器群と酷似した資料であるといえよう。

以上の検討結果から赤異遺跡の土器群の年代は、島海欄跡Ⅲ-2群、大釜館遺跡7号、9号溝、大新町遺跡 RD702 土坑と同時期である可能性が高く、概ね11世紀中葉に比定するのが妥当であろう。したがって大新町遺跡 RE701 竪穴、小屋塚遺跡 RA8714 竪穴建物跡などの出土資料は土器の特徴から赤異遺跡よりも古く位置づけられ、10世紀末から11世紀前葉を中心とした時期となるだろうか。そのように見てくると、扇川では奈良時代から平安時代中頃まで、大館町、

大新町、小屋塚、里館遺跡などに集落が営まれていたが、10世紀の後半頃から人が多く集まりはじめ、11世紀には赤裳遺跡の近くに、安倍氏の統治拠点が設けられるに至った。さらに11世紀中頃には安倍氏の扇川欄と鵜戸欄が営まれたが、前九年合戦終結によって安倍氏と共に滅亡に至ったと考えられる。

3 まとめと課題

赤裳遺跡は縄文時代中期頃に狩猟の場であったが、その後長い間人間の生活痕跡は途絶えていた。それが平安時代後期の10世紀末ごろからにわかに活況を見せた。当時奥六部北端の岩手郡は、鎮守府理国城在宇官人の筆頭安倍頼時（頼良）の支配が及んでおり、この盛岡市扇川のどこかに扇川欄と鵜戸欄が置かれていたと考えられてきた。赤裳遺跡は11世紀中葉を中心とした土器生産遺跡であり、安倍氏が滅んだ前九年合戦と重なる時代である。調査区の西端にあった竪穴建物は、鍛冶工房から土器の制作工房へと変化した。竪穴建物廃絶後（あるいは廃止後）まもなく竪穴は土器焼成土坑（土器窯）へと変化した。周辺からは簡素な掘立柱建物跡のほか、土器焼成土坑、土取りの土坑などが複数確認されており、政治的な儀礼行為や宴会のための土器がこの場所で大量に生産されて、安倍氏の館や欄に供給されていたのであろう。この土器生産施設の規模や範囲はまだ明らかではないが、南側畑地には11世紀土器の散布が認められており、周辺部に拡がりを持つことは確実である。今回の調査区では径2m前後の土器焼成土坑と、竪穴建物を活用した大規模な焼成土坑が存在していた。竪穴建物は当初小鍛冶等の工房であり、ある時期からは粘土や配合土の集積場所でもあった。それが土器整形の工房に変化し、廃絶後は大規模な土器焼成土坑へと変化した。竪穴は小鍛冶工房から土器整形工房のころは、径1.2m～2.1mの土器焼成土坑での焼成と考えられ、その後大規模な焼成土坑が必要になったのである。こうした背景には土器の供給先である安倍氏の拠点施設の大規模な整備拡充があったことが推定できる。おそらくは赤裳遺跡の東側あたりから大館町、大新町、小屋塚などの遺跡にかけての地域から、この時期の安倍氏の欄が存在したのではなかろうか。その後稲荷町遺跡、大館町遺跡、里館遺跡に12世紀の手摺ねかわらけ、ロクロかわらけを使用した遺跡が確認されるようになるが、前九年合戦の後から100年近くの間この地域は、政治的な空白時代となっていたらしい。このようにみえてくると、赤裳遺跡の土器生産の年代は概ね11世紀中葉であり、そのなかでも前九年合戦（1051年～1062年）終結を降らない時期と考えるのが妥当なところではないだろうか。この時代に安倍氏関係で儀礼行為の土器を大量に必要としたのは、康平5年（1062）に源頼義と清原武朝の攻撃で陥落した扇川欄と鵜戸欄であろうことは容易に推察できる。

扇川地域の遺跡の中で、10世紀末から11世紀中葉の遺構遺物は、境橋遺跡（西青山三丁目）、稲荷町遺跡（大館町、稲荷町）、宿田遺跡（前九年一丁目）、上堂頭遺跡（上堂四丁目）を四隅としたエリアで確認されている（第47図）。これまでの発掘調査結果を基に検討するならば、この遺跡分布範囲内に安倍氏の扇川欄、鵜戸欄が存在したのほほは確実であろう。各遺跡は滝沢台地南部を囲むように分布しており、10世紀末～11世紀の遺構遺物が存在する大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡付近から北側にかけて、安倍氏の統治拠点が存在した可能性がある。またこの地域の東方、安倍館遺跡から館坂遺跡付近は北上川に望む崖であり、しかも南に突き出した地形であることから、地形的に欄などの防衛拠点が置かれていた可能性がある。

安倍氏の拠点鳥海欄跡は、鳥海欄の時代の遺構群を古い段階をⅢ-1群（期）、新しい段階をⅢ-2群（期）としている。欄の中心的機能を果たしたとされる四面廂建物（縦街道南、鳥海地区西側）のうち、Ⅲ-1期の四面廂建物は、東の段丘崖から170m離れた縦街道南地区の平坦地にあり、鍛冶工房や竪穴建物、櫓を備えた要害的曲輪は、四面廂建物から400m南に離れて、沢を挟んだ二ノ宮後の孤立丘に立地する。格式高く公的性格の強い四面廂建物を中心とする官衙的性格のエリアと、安倍氏のプライベート空間であり防衛性の高い要害施設が竪壇を置いて存在したことになる。それがⅢ-2期になると、原添下南東部に掘って囲まれる一郭が営まれ、この中に2間×5間に四面廂建物と2間×7間建物を中

心に堅穴建物等で構成される居館が出現することが示している（金ヶ崎町教育委員会 2013、浅利英克 2018）。Ⅲ-2 期にはⅢ-1 期の二宮後地区の要害的曲輪も継続しており、鍛冶場や櫓が構えられている。さらに二ノ宮後と原添下の中間の島海地区には大形の空堀が構えられて、二ノ宮後から島海、さらに原添下南東部までの3つの地区を一体化する縄張で大きな堀が形成されたのである。原添下南東部には段丘先端をL字形の空堀で方形区画された一郭が構えられ、郭内には四面南建物と2間×5間建物各1棟、堅穴建物3棟が計画的に配置された居館が置かれている。この段階に至り、安信氏の私的居館が防御施設を伴って、堀の内部に整備されたことになる。

島海堀のあり方を厨川地域に求めた場合、地形的に要害となる北上川沿いの安信館、館坂遺跡付近には防御性の強い堀戸堀。そこから約900mの距離を置いて、滝沢台地南辺の大館町、大新町、小塚塚遺跡以北の台地上に岩手郡統治拠点としての厨川堀という配置が想定できそうである。前述のとおり、堀に囲まれた稲荷町遺跡からも11世紀の土器が出土しており、厨川堀の周囲には堀戸堀のほかにも防御拠点が複数存在した可能性がある。また大館町遺跡から大新町遺跡、小塚塚遺跡、里館遺跡の東部では、詳細な年代は不明確ながら段丘崖や台地の縁辺に添う溝や大溝が確認されており注意される（岩手県教育委員会 1979、盛岡市遺跡の学び館 2012、盛岡市教育委員会 1982、1983、1986、2008）。安信館、館坂遺跡と比較して、さほどの要害性はない厨川堀の周囲に、防御のための大溝を廻らせた可能性もある。今後はこの大溝群の年代についてさらに明確にしていくことが重要である。安信館遺跡、館坂遺跡ともに11世紀の明確な遺構遺物は未確認であり、その立証は今後の課題であるけれども、安信館には中世後期に工藤氏の栗谷川城（厨川城）が構えられたことでもその要害性は明らかである。このあたりが周辺では最も要害の地形であることを念頭に置きながら遺跡の究明にあたる必要があるだろう。安信氏の堀については胆沢郡金ヶ崎町の島海堀跡が確定したほかは、依然として遺跡が確定していない。一関市川崎の河崎掘擬定地では11世紀、12世紀の土器破片とともに、張山山麓から北上川の平地を遮断する二重の大溝が確認されており、発掘調査担当者の羽柴直人は交通遮断施設としての河崎堀を主張している（羽柴直人 2004、2011）。北上市黒沢尻の安信館は黒沢尻堀の擬定地であるが、これまでの発掘調査では中世黒沢尻堀の遺構遺物が確認されている（北上市教育委員会 1977、1983）。黒沢尻という堀の名称と現地地形を考えた場合、黒沢尻と北上川合流点南側の安信館以外には、堀の所在を考えにくい。この場所は近代まで川湊の所在地であったことから、黒沢尻湊を確保する目的で堀が設置されたとすれば、康平5年（1062）の合戦時に川湊周辺の防御施設を急造していた可能性もある。堀の存続期間が短く、統治拠点としての恒久的な堀や館ではなかった場合には、考古学的には遺構、遺物とも脆弱である可能性もある。厨川堀、堀戸堀がどのような歴史をたどったのかは全く解らないが、特に堀戸堀が戦時のみに使用された要害であった場合は、河崎堀や黒沢尻堀と同様に、堀の本体を考古学的に把握しにくい状況であるのかも知れない。安信館遺跡、館坂遺跡で11世紀の明確な遺構と遺物が確認されなかったのは、中世後期による地形変化のほかにも、このような背景があるのかもしれない。今後は厨川堀、堀戸堀推定地域での発掘調査には、これまで以上に注意を払いながら、堀の遺跡究明を念頭に置いた調査を進めなくてはならない。それと共に、赤松遺跡の範囲内このような遺構遺物が残るの今今後の開発を注視しながら遺跡の実態究明を進めたい。

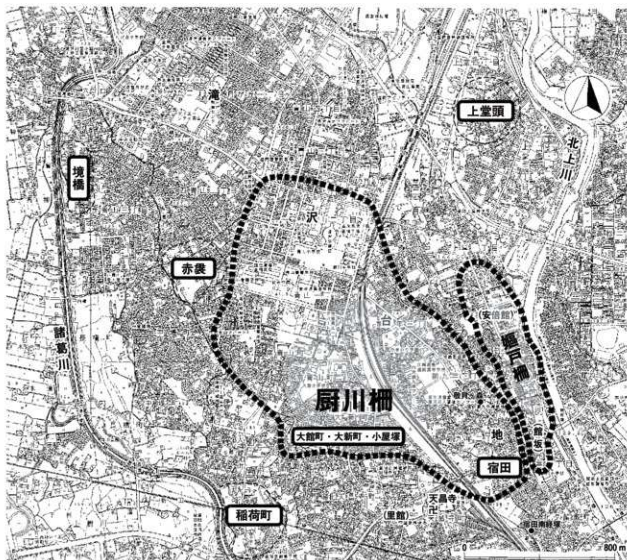
（室野秀文）

引用、参考文献

- 浅利英克 2018 「平成 29 年度島海堀跡発掘調査概要」『平成 29 年度島海堀跡シンポジウム資料』金ヶ崎町教育委員会
井上雅孝 1996 「岩手県における古代末期から中世初期の土器様相」『中世土器の基礎研究 XI』中世土器研究会
岩手県教育委員会 1979 「厨川堀擬定地」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅲ—』岩手県教育委員会、日本国有鉄道
金ヶ崎町教育委員会 2013 「岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第 70 集」『島海堀跡 平成 22 年・23 年度（第 18・19 次）発掘調査報告書』（浅利英克編）
北上市教育委員会 1977 「川岸遺跡調査概報」
北上市教育委員会 1983 「川岸遺跡（1981・82 年度調査）」
久保田正寿 1997 「第 3 章第 2 節 土師器の焼成方法」『古代の土師器生産と焼成遺構』（宮跡研究会編）、真陽社
菅原祥夫 1997 「第 2 章第 9 節 東北北部—古代陸奥の土師器生産体制と土師器焼成坑—」『古代の土師器生産と焼成遺構』

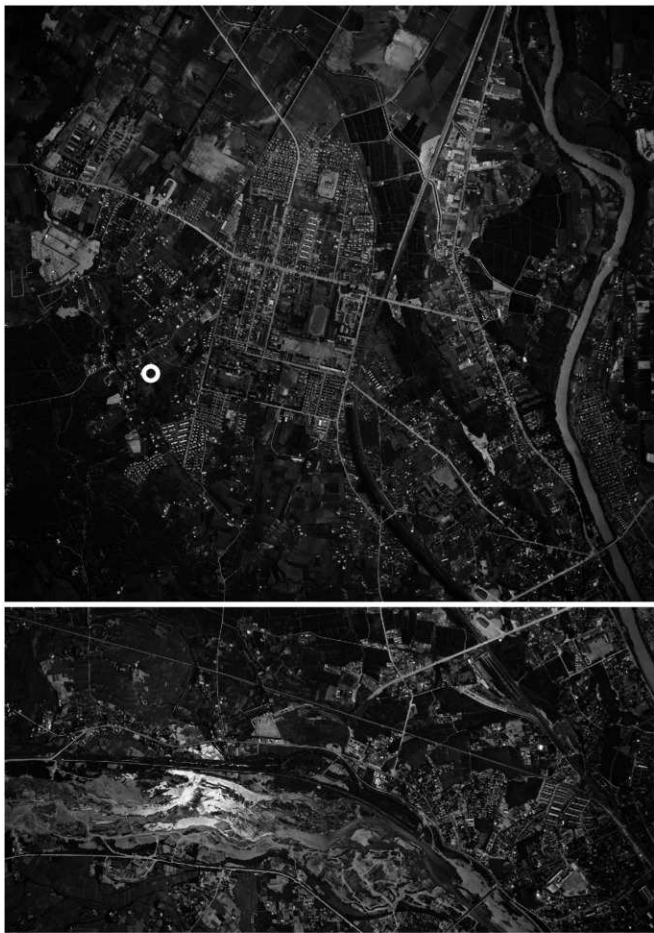
(窟跡研究会編)、真陽社

- 高橋昭治、八木光則 1994 「岩手町出土の古代末期の土器」『岩手考古学』第6号 岩手考古学会
滝沢村埋蔵文化財センター 2003年5月 (滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第1集)『大釜館遺跡発掘調査報告書—滝沢村
区画整理事業遺跡発掘調査—』(吉田努、井上雅孝編)滝沢村教育委員会
羽柴直人 2004 「安倍氏の櫓の構造・交通遮断施設の視点から」『平泉文化研究年報』第4号 岩手県教育委員会
羽柴直人 2005 「安倍氏の櫓の構造・居館としての櫓」『平泉文化研究年報』第5号 岩手県教育委員会
羽柴直人 2006 「安倍氏の櫓から平泉の居館へ—櫓之御所遺跡の櫓の系譜—」『平泉文化研究年報』第6号 岩手県教育委員会
羽柴直人 2011 「東日本初期武家政権の考古学的研究—平泉勢力圏の位置づけを中心に—」総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻 平成22年度(2010)
村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
室野秀文 1995 「厨川の中世初期居館—稲荷町遺跡の性格—」『岩手考古学』第7号 岩手考古学会
古川一明 2007 「多賀城跡の11世紀—12世紀の土器について」『宮城県多賀城跡調査研究年報2006多賀城跡』(78次)宮城県多賀城跡調査研究所
盛岡市道跡の字び絵 2012 「検証・厨川櫓—古代末期のもりおか—」
盛岡市教育委員会 1982 「大館道跡群大館町道跡—昭和56年度発掘調査概報—」
盛岡市教育委員会 1983 「大館道跡群大新町道跡—昭和57年度発掘調査概報—」
盛岡市教育委員会 1986 「大館道跡群大新町道跡・大館町道跡—昭和60年度発掘調査概報—」
盛岡市教育委員会 2008 「盛岡市内道跡群—平成18・19年度発掘調査報告—」(大館町道跡第77次・78次ほか)



第47図 厨川櫓、姫戸櫓擬定地周辺

写 真 图 版



遺跡周辺空中写真 (国土地理院 1965年6月12日を一部加工して使用)



遺跡全景（南から）



遺跡全景（東から、背景は大釜方面）



第4次調査区全景



RE01 竪穴建物跡



第3次調査区全景



RD02 土器焼成土坑（南から）



RD02 土器焼成土坑（北西から）



RD02 土器焼成土坑（南から）



RE01 竪穴建物跡（東から）



RE01 竪穴建物跡，RD20 土器焼成土坑土層断面



RD20 土器焼成土坑（RE01 竪穴建物跡上層）



RE01 竪穴建物跡 2期床面（東から）



RE01 竪穴建物跡 2期床面と西側焼土（C層）と土器出土状況



糖櫃穴上面確認状況（上が西）



糖櫃穴上部土器埋納状況（東から）



轆轤穴の回転軸と詰め石（東から）



轆轤穴回転軸下部の状況（東から）



RD16 土坑（東から）



RD16 土坑土層断面



RE01 竪穴建物跡・RD20 土器焼成土坑調査風景



RE01 竪穴建物跡轆轤穴の精査



RE01 竪穴建物跡床面



RE01 竪穴建物跡床面の小皿



RE01 竪穴建物跡 E 層の坏と小皿



RE01 豎穴建物跡轆轤穴埋納土器群



RE01 豎穴建物跡轆轤穴埋納土器類



RE01 豎穴建物跡 D 層の小形器台



(第 11 図 8)



(第 11 図 7)



(第 11 図 8)



(第 11 図 7)



RE01 竪穴建物跡床面 (第 11 図 8)



RE01 竪穴建物跡床面 (第 11 図 7)



RE01 竖穴建物跡 E 層 (第 14 图 118)



RE01 竖穴建物跡 E 層 (第 12 图 50)



B2 層 (第 22 图 380)



B2 層 (第 20 图 281)



B2 層 (第 22 图 380)



B2 層 (第 20 图 281)



RE01 竪穴建物跡土器溜り (第 22 図 358)



RE01 竪穴建物跡土器溜り (第 22 図 355)



(第 22 図 358)



B3 層 (第 22 図 382)



B3 層 (第 24 図 394)



B3 層 (第 22 図 382)



RD02



RD02



RD02



RD02



RD13 (第 36 图 3)



RD02



RD13 (第 36 图 1)



RD02



RD13 (第 36 図 31)



RD13 (第 36 図 7)



RD18 (第 46 図 7, 6)



RD18 (第 46 図 5) RD14 (第 36 図 17)



RD18 (第 46 図 7, 6)



RD18 (第 46 図 5) RD14 (第 36 図 17)



ミニチュア土器



ミニチュア土器



出土状況



賽子・基石



鉄製品



鉄滓



有孔石



磨製石斧

報告書抄録

ふりがな	へいせいにしゅうろくねんどにしゅうなねんどもりおかしないいせきぐん あかほろいせき							
書名	平成26年度・27年度盛岡市内遺跡群 赤襲遺跡							
副書名	—第3次・第4次発掘調査報告書—							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	室野秀文、今松佑太、神原雄一郎、鈴木俊輝							
編集機関	盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 TEL 019-635-6600							
発行機関	盛岡市教育委員会							
発行年月日	2018年3月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
赤襲遺跡	岩手県盛岡市 西青山一丁目 21番、16番2	03201	LE05-0397	39° 42' 21.07"	141° 6' 23.67"	3次 2014.10.14 ～12.25 4次 2015.5.11 ～6.30	1,088	個人住宅 及び農作 業小屋の 新築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
赤襲遺跡 第3次・第4次 発掘調査	狩猟	縄文時代	陥し穴、土坑		縄文土器破片、石器		土師器生産遺跡	
	土師器 生産遺跡	平安時代後期	竪穴建物跡1(轆轤穴)、 掘立柱建物跡4、掘立 柱列跡2、柱穴82、土 器焼成土坑4、土取り 土坑5、遺物包含層1		土師器坏、小皿、高 台付坏、甕、鉢、須 恵器破片、刀子、紡 錘車、鉄鍬、鉄滓、 糞子、礬石			
	集落	近世以後	土坑3、溝3		肥前染付碗破片、鍬			
要約	竪穴建物跡は鍛冶工房から土師器生産工房へと変遷し、廃絶後土師器焼成土坑へと変貌している。周囲には土器焼成土坑や土取り土坑、掘立柱建物が存在する。出土土器は儀礼行為に供されるもので、安倍氏の拠点厨川柵、堀戸柵などに供給したと考えられる。厨川柵・堀戸柵が近くに存在することを裏付ける調査成果である。							

平成26年度・27年度盛岡市内遺跡群

赤襲遺跡

—第3次・第4次発掘調査報告書—

平成30年(2018)3月28日

盛岡市教育委員会

編集 盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866 盛岡市本宮字荒屋13番地1

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-0184 盛岡市青山4丁目10-5

